



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北欧アイスランド文学の歴史（2）：自然主義から新ロマン派まで
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 129, 1(左)-62(左)
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39996
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS129-004.pdf



北欧アイスランド文学の歴史 (2)

—— 自然主義から新ロマン派まで ——

清 水 誠

Íslensk bókmenntasaga (2) — frá raunsæi til nýrómantíkur —

(*The Annual Report on Cultural Science* No.129. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2009. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

5. 自然主義文学の萌芽 —— コペンハーゲンからの出発 ——

5.1. 雑誌『ヴェルザンディ』の創刊

1871年、コペンハーゲン大学の文芸批評家ゲオウ・ブランデス (Georg Brandes 1842～1927) は、後に『19世紀文芸主潮 I-VI』(デ *Hovedstrømningerne i det nittende Aarhundredes Litteratur I-VI* 1872～90) として出版された一連の講義を開始した。それは文学と美学を他の諸科学と同様の原則で捉え、ドイツの哲学者ヘーゲルの学説に従って、対立概念の弁証法的止揚により発展するとみなす進歩主義思想に基づくものだった。1882年、ブランデスから強い影響を受けた4人のアイスランド人学生は、運命を司る女神の名前にちなんだ雑誌『ヴェルザンディ』(*Verðandi*)を創刊した。1852～61年生まれのギェストゥル・パウルソン、ベルテル E. Ó.ソルレイフソン、エイナル H.クヴァーラン、ハンネス・ハフステインがそれである。同誌はロマン主義、中世文学の伝統への回帰、教会主義をすべて否定し、現実を直視する

必要性を説き、文学活動を通じて人々の意識の向上と社会的貢献を志向した。第1号だけで終わり、他の雑誌に吸収されたが、掲載された短編や詩は進歩的な社会意識や女性解放の思想を具現し、アイスランドに自然主義文学を初めて伝えた。

『ヴェルザンディ』の同人たち (Verðandimenn) の中で、ギェストゥル・パウルソンは同誌の刊行後、学業を廃して祖国に戻り、レイキャヴィークで雑誌『シュズリ』(Suðri 1883～86)を創刊した。同誌には短編小説、論説、翻訳を掲載して、文学における社会意識の重要性を説き、因習を批判した。1888～89年には『レイキャヴィークの生活』(Lífið í Reykjavík 1888)、『現代の我らの文学者たちと文学』(Skáld vor og skáldskapur á þessari öld 1889)、『アイスランドにおける教養の現状』(Menntunarástandið á Íslandi 1889)と題した3回の講演を行い、アイスランド文学と文化の停滞を批判し、ブランドスの進歩主義思想を訴えた。ハルネス・ハフステインも人間の祖先とされる北欧神話の神の名前にちなんだ雑誌『ヘイムダトルル』(Heimdallur 1884)を創刊して(1～12号)、ブランドスの著作を翻訳・紹介し、自身の詩やエイナル H.クヴァーランの小説、ヨーロッパの文学作品の翻訳を掲載した。『アイスランド文学の衰退』(Hnignun íslensks skáldskapar)と題する講演では、社会的進歩の必要性を唱え、それには文学者も参画できると力説した。こうして、アイスランドでは前述のロマン派詩人ベーネディクト・グレンダルによる反論など、大きな論争が巻き起こった。

5.2. アイスランド自然主義文学の性格

自然主義の散文文学は1880年代のアイスランド文学を席捲し、他の北欧諸国以上に重要な位置を占めた。ただし、その性格にはこの遠隔の島国に独特の事情が関係していた。当時のアイスランドには「都市」と呼べる共同体が皆無であり、近代産業が未発達で、市民階級が育っておらず、デンマーク支配から脱することが悲願だった。他のヨーロッパ諸国の自然主義作家が社会的問題意識を抱いた中産階級として、下層階級の貧困と抑圧の実体を暴いたのとは異なり、アイスランドでは貧困と抑圧の実態は自明だった。この点で

アイスランドの自然主義文学は他のヨーロッパ圏と一線を画し、ロマン派文学と同様に、政治的独立を志向する国民主義的イデオロギーを濃厚に反映していた。ギェストゥル・パウルソン自身も、ロマン派と自然主義を峻別することに疑義を表明する論文を発表しているほどである。雑誌『ヴェルザンディ』の同人たちが第一に批判したのは、中世の伝統にたいする「郷愁」だった。サガの朗読に終始するのは現実直視からの逃避であり、社会の悪癖は論争の場に持ち込むことで正すべきで、この意味でのヒューマンイズムを郷愁よりも優位に置いたのである。この考え方からすれば、後述するエイナル H. クヴァーランの作品も理解しやすい。

自然主義文学の興隆は爆発的ではあったが、時期的には比較的短く、1910年以後は衰えていった。『ヴェルザンディ』の作家たちの作風も、早世したギェストゥル・パウルソンを除いて、変わっていった。ちなみに、アイスランド文学では「写実主義、リアリズム」(realismi)と「自然主義」(natúralismi)の区別が意味を持たず、一律に raunsæi (raun「経験、試練」+ -sæi「視点、観察」と呼ばれる。本書ではこれを「自然主義」とする。

5.3. ギェストゥル・パウルソン——自然主義文学の代弁者、短編小説の開拓者

『ヴェルザンディ』の精神の忠実な代弁者がギェストゥル・パウルソン (Gestur Pálsson 1852～91) である。険しい自然で知られる北西部の西フィヨルド地方 (Vestfirðir) の (東) バルザストランドルシスラ ((Austur-) Barðastrandarsýsla), レイクホウラスヴェイト (Reykhlólasveit) の本好きな農夫の家庭に生まれ、レイキャヴィーク・ラテン語学校に学んだ。1875年に留学したコペンハーゲンで神学から自然主義文学に転じ、82年の秋に帰国してジャーナリズムの職に就いた。

ギェストゥルはノルウェーのアレクサンデル・ヒエッラン (Alexander Kielland 1849～1906)、イプセン、ロシアのツルゲーネフの影響を受けて、短い作家活動の中で社会的問題意識とすぐれた心理描写を交えた十数編の短編を残した。弱者の立場から不正と偽善へ鋭い批判を展開し、近代短編小説の

開拓者と称えられる。『ヴェルザンディ』に掲載された『愛の家』(*Kærleikshheimilið* 1882) は代表作のひとつである。富裕な農家の息子ヨウン (Jón) と母方の家に仕える貧しい女中アンナ (Anna) の愛を扱ったもので、ヨウンはアンナと恋に落ちるが、独善的な母は結婚を許さず、アンナがヨウンの子供を宿していることを知ると、ヨウンに牧師の娘との縁談を持ちかける。自分の将来を懸念するヨウンは承諾するが、これを知ったアンナは失望のあまり溺死する。葬儀のさいに牧師の弔事を聞いたヨウンは罪の意識を失い、アンナの棺に土を盛りながら、順風な生活に希望を抱くという筋である。ブランドスに激賞されたもうひとつの代表作『春の夢』(*Vordraumur* 1888) は、若い学識ある神学生が高名な牧師の美しい娘と婚約し、地区の住民から牧師の後継者に選出される。しかし、選挙の結果は牧師が仕掛けた術策によるもので、それに気づきながらも富と地位を保証された生活を選ぶという、類似したテーマを扱っている。『婚約』(*Tilhugalíf* 1888) は食べ物^{とが}を盗んだ大工が咎めを受けて、社会から追放されるという筋書きである。3作ともいかにも魅惑的な題名で飾りながら、内容は社会的偽善への容赦ない批判であり、読者の表面的期待は見事に裏切られる。ほかにも、レイキャヴィークの水運び人夫ハンス・ヴェッグルの死にたいする上流階級の反応を風刺した『ハンス・ヴェッグル』(*Hans Vöggur* 1883)、病弱な弟を嵐の夜に雪山小屋に招き入れず、死に至らしめた不慮の過失から、良心の呵責に悩む男を描いた『船主シーグルズルの物語』(*Sagan af Sigurði formanni* 1887)、動物小説の先駆とされる哀れな馬の物語『スキョウニ』(*Skjóni* 1884) などがある。

レイキャヴィークの日常生活に小説の題材を取ったことは、まさに革新的な試みだった。しかし、辛辣^{しんらつ}な皮肉と風刺、灰色のペシズムに満ちたその作風は、散文文学というジャンルを中世以来のサガ文学の伝統の中でイメージするほかなかった当時の人々には、容易に受け入れがたいものだった。ギェストゥルはレイキャヴィーク住民の向上心の欠如に落胆し、1890年にカナダのウィニペグに渡った。そして、エイナル H. クヴァーランらが創刊した移民向け週間新聞『ヘイムスクリングラ』の編集にエイナルとともに携わったが、翌年の夏に同地で早世した。1902年にレイキャヴィークとウィニペグで作品

集が刊行され、27 年にはレイキャヴィークで旧来の友人エイナルが序文を寄せた『全集』(Ritsafn) が編まれた。

詩作品は少なく、当時の評価は低かったが、次のような秀作も残している。

乞食の老婆 ギェストウル・パウルソン
(Betlikerlingin Gestur Pálsson)

一面の霜雪の最中^{さなか} 階段の脇に身をかがめ
カタツムリのように ひたすら縮こまり
節くれ立った両手を あちこちまさぐり
暖を取ろうと ぼろ切れをつかんで

Hún hokin sat á tröppu, en hörkufrost var á,
og hnipraði sig saman, uns í kufung hún lá,
og kræklóttar hendurnar titra til og frá,
um tötrana að fálma, sér velgju til að ná.

灯火の消えた^{としげ} うつろな眼^めで
海原^ほを吼え裂くにも似た 猛吹雪に襲われ
当てもなくぎこちなく あたりを見回すが
目を留めるものとして無く 暗闇に望みを無くし

Og augað var sljótt sem þess slokknað hefði ljós
í stormbylnum tryllta, um lífsins voða-ós,
það hvarflaði glápanði, stefnulaust og stirt,
og staðnæmdist við ekkert — svo örvæntingarmyrkt.

額には深く彫り込まれた 皺^{しわ}と皺が重なり合い
嘆きの謎文字を刻み出すが 意味を知る者として無い

だれにその苦渋苦難の跡を 解き明かす術^{すべ}があらう
幸せの殉教者たちが 人の世で被るべき掟を

Á enni sátu rákir og hrukka, er hrukku sleit,
þær heljarrúnir sorgar, er enginn þýða veit.
Hver skýra kann frá þrisund og plágum öllum þeim,
sem þíslarvottar gæfunnar líða hér í heim?

乞食の老婆は時の流れの中で だれにも悟られぬまま
色褪^あせ 消えていった 真珠の玉かもしれず
かつては指輪に盛られた 珠玉の宝であったものを
人の世にガラスの破片と散り果て 屠^{ほふ}られ 葬り去られたのだ

Hún var kannski perla, sem týnd í tímans haf
var töpuð og glötuð, svo enginn vissi af,
eða gimsteinn, sem forðum var greypur láns í baug,
— en glerbrot var hún orðin á mannfélagsins haug.

5.4. ハンネス・ハフステイン — 初代のアイスランド人大臣

ハンネス・ハフステイン (Hannes Hafstein 1861～1922) とベルテル E. Ó. ソルレイフソン (Bertel E. Ó. Þorleifsson 1857～90) は詩人として名を成した。ただし、ベルテルはペシミズムに傾き、若くして自ら命を絶った。一方、北部のメズルヴェトリル (Möðruvellir) 出身のハンネスはブランデスと密接に交わり、4人の中で唯一、コペンハーゲン大学から学位(法律学)を得た人物である。劇作家イブセンの革命的作風を模範とし、とくにロマン派詩人ハイネの作品をドイツ語から翻訳した。『生きることはすばらしい』(*Himneskt er að lifa*) という題名の詩が示すように、自然主義とは異なる面があり、作品は楽観的な未来志向の精神にあふれている。北アイスランドの自然を擬声語の効果を交えてうたった詩でも知られている。

ハンネスは社会問題を現実的に捉える能力に長じていた。「嵐よ、大地に吹き寄せるおまえを私は愛する」 („*Ég elska þig, stormur, sem geisar um grund*“) で始まる、雑誌『ヴェルザンディ』の冒頭を飾った『嵐』 (*Stormur*) は名高い作品だが、その詩で宣言した革新的な思想を社会的貢献を通じて実践することに腐心した。25歳で祖国に戻ったハンネスは官吏となり、有力な政治家に成長した。そして、1904～09年には、デンマーク支配から脱却しつつあった当時、アイスランド人として初代の大臣の職に就いたのである (1912～14 再任)。おもな作品は『詩作品』 (*Ýmisleg ljóðmæli* 1893) に収録され、『詩集』 (*Ljóðmæli* 1916, 1925 増補版) にまとめられた。

5.5. ソルステイトン・エルトリングソン — ロマン派から出発した自然主義詩人

ロマン派と自然主義の性格を併せ持った詩人にソルステイトン・エルトリングソン (Þorsteinn Erlingsson 1858～1914) がいる。南部のラウンガウルヴァトラシスラ (Rangárvallasýsla), ストウラメルク (Stóramörk) の裕福な家に生まれ、18歳で前述のロマン派3大詩人に認められてレイキャヴィーク・ラテン語学校に進んだ。祖国の自然と文学の伝統を重んじ、前述のシーグルズル・ブレイズフィエルズを敬愛して、晩年まで4行詩のリームルを試みた。民間伝承の採集と編集も行っており、元来、素朴で純粋な天性のロマン派的気質の持ち主だった。1883年にコペンハーゲン大学に進むと、法律学、ついで古ノルド語文献学を学び、叙情性あふれる詩作品を発表して早くから知られていた。しかし、『ヴェルザンディ』の刊行後はブランデスの信奉者となり、ジャーナリストとして16年間、コペンハーゲンで貧困生活を送る中で、ブルジョワ中心の社会秩序に反発して自然主義に転じた。社会主義労働運動にも従事し、後述する『ラスクー1887年の生誕百年祭に寄せて』など、デンマーク絶対王政と資本主義と教会を非難する詩を書いた。これはスキャンダルとなり、学業にも悪影響が及んで、学位を取得できずに祖国に戻った。その後はレイキャヴィークで編集や教師の職に就き、経済的に恵まれない生活を送った。水力資源の産業利用に反対の立場を取り、推進派だった新ロマン

派のエイナル・ベネディフツソンとは詩風でも信条的にも対立関係にあった。

ソルステイトンの名前を不朽にしているのは、帰国後の翌年に発表した社会批判の作品を多く含む処女詩集『棘』(*Pyrnar* 1897)である。小品を加えた増補版が3度再版され、文献学者シーグルズル・ノルダルも解題を加えている。ソルステイトンは1930年代末の社会主義叙情詩を先取りした国民主義的自然主義詩人として、評価が高い。短編集『動物たち』(*Málleysingar* 1928)も残しており、同類の作品を書いた次章で述べるソルギルス・ギャトランディとも交流があった。1958年には『全集 I-III』(*Ritsafn I-III*)が出ている。

それでは次に、近代アイスランド語学文学の礎を築いたデンマーク人言語学者ラスクを賛美した上記の詩を紹介しよう。

ラスク — 1887 年の生誕百年祭に寄せて

ソルステイトン・エルトリングソン

(*Rask — Á hundrað ára afmæli hans 1887 Þorsteinn Erlingsson*)

憂いの極みの時代にあなたは来た
母国の息子らが力なくうなだれ
遠い過去から流れ来る漆黒の雲が
太古の空を覆い尽くしたときに
あなたの中にアイスランドの幸は
明けの明星の初の輝きを見た
そこで我らは類^{たぐいまれ}稀な善意から
こぼれ落ちる喜びを汲み取った

Þú komst þegar Fróni reið allra mest á,
er aflvana synir þess stóðu
og myrkviðrin umliðnu öldunum frá
þar eldgömlu skýjunum hlóðu,

en hamingja Íslands þá eygði þig hjá
þeim árstjörnum fyrstar sem glóðu.
Og þaðan vér áttum þann fögnuð að fá,
sem fæst hefur komið af góðu.

デンマーク人の置き土産^{みやげ}の粗末さよ
その下心は見え透いたもの
吸い尽くした生血^{いきち}の跡は
時の流れとて封じ去るを得ず
眠りに乗じて生身を襲い
盗みの限りを尽くした挙げ句
古写本をまんまと持ち去るが
ろくに読めもせぬぶざまさよ

Því fátt er frá Dönum, sem gæfan oss gaf,
og glögggt er það enn, hvað þeir vilja.
Það blóð sem þeir þjóð vorri útugu af,
það orkar ei tíðin að hylja:
svo tókst þeim að meiða' hana meðan hún svaf
og mjög vel að hnupla og dylja.
Og greiðlega rit vor þeir ginntu um haf —
það gengur allt lakar að skilja.

それでもなお アイスランドは
だれよりもこの国を愛^{いつく}しみ
汗を流すよう若者を鼓舞し
持てる力の限りを尽くして
地に堕ちた聖なる姿を蘇らせた
その人をいかにして忘れ得よう

アイスランドは子孫らにその名を
唱え^{なた}称えることを教えるのだ

Hví mundi þó Ísland ei minnast á hann,
sem meira en flestir því unni,
sem hvatti þess drengi, sem drengur því vann
og dugði því allt hvað hann kunni,
og hjálpaði að reisa við helgidóm þann,
sem hruninn var niður að grunni.
Því lætur það börnin sín blessa þann mann
og bera sér nafn hans á munni.

5.6. エイナル H.クヴァーラン — 心霊主義を奉じたプロテスタント人道主義者

『ヴェルザンディ』の同人の中で最後に紹介するエイナル H. (=ヒェルレイフソン) クヴァーラン (Einar H. (=Hjörleifsson) Kvaran 1859～1938) は、西部の南ムーラススラ (Suður-Múlasýsla), ヴアトラネース (Vallanes) に牧師の息子として生まれ、北部のスカーガフィエルズル (Skagafjörður) の周辺で育った。1881 年にレイキャヴィーク・ラテン語学校を卒業すると、コペンハーゲン大学で経済学を修めたが、文学に転じて中途退学し、『ヴェルザンディ』の創刊に尽力した。1885 年にカナダのヴィニペグに渡り、アイスランド人移民向けの週間新聞『ヘイムスクリングラ』(*Heimskringla*) と『レグベルグ』(*Lögberg*) をそれぞれ 86 年と 88 年に創刊するなどして活躍した。処女作はコペンハーゲン留学以前の 1880 年にさかのぼるが、カナダ滞在時代の 90 年に、恋人を追って北米大陸に渡った青年の失望を描いた短編『希望』(*Vonir*) を発表した。アイスランド人はこの作品に注意を払わなかったが、1900 年にデンマーク語訳の書評を書いたブランデスに「真の珠玉」と激賞されて名声を得た。移住した 10 年後の 1895 年に祖国に戻ると、翌年から 1906 年までジャーナリストとして活躍し、デンマークからの独立を訴える記事を

多数掲載するレイキャヴィークの週間新聞『イーサフォルド』(*Ísafold* 1874～1929)などで健筆を振るった。

エイナルは『ヴェルザンディ』の創刊者中、最も長寿に恵まれ、半世紀以上も作家活動を行った。新聞・雑誌への寄稿にも積極的で、女性作家トルヴヒルドゥル・ホウルムに続いてもっぱら文筆家として生計を立てた。ただし、20世紀に入ると自然主義から離れ、プロテスタンティズムの精神に基づく慈愛と靈魂の不滅を奉じて心靈主義(*spírítismi*)に転じ、『アイスランド心靈研究協会』(*Sálarrannsóknarfélag Íslands* 1918)を創設した。そして、20年以降は終生、同協会の機関紙『朝』(*Morgunn* 1920～38)の編集長を務めた。

エイナルはレイキャヴィーク市民の生活を初めて本格的に長編小説の題材に取った。その好例は、『崇高なる力』(*Ofurefli* 1908)と続編『黄金』(*Gull* 1911)である。両者は富裕な商人の権力と腐敗にたいする若い牧師の苦闘と勝利を描いたもので、人々の精神的向上を鼓舞し、旧来の硬直した教条主義にたいする自由な信仰の勝利が根底に流れている。従来、風刺の対象になることが多かった牧師を好意的に描いた初の作品とも言われる。代表作のひとつ、長編小説『魂は甦る』(*Sálin vaknar* 1916)では、苦境に同情して殺人者を救った罪で刑に処せられた男性の主人公が、周囲の同情を獲得して幸福な結婚をし、政治活動に専心する過程を描いた。エイナルは1897年設立の「レイキャヴィーク演劇協会」とも関係を保ち、劇作家としても活躍した。代表的な市民劇『他者の罪』(*Syndir annarra* 1915)でも、他人の罪を許容することで神の慈愛にあずかり、和解に至る過程が問題になっている。大作『ランヴェイグの物語 I-II』(*Sögur Rannveigar I-II* 1919～22)でも、コペンハーゲンの裕福なアイスランド女性ランヴェイグ(*Rannveig*)が父親の宿敵だった人物の息子と結婚し、彼女に歯向かう相手にたいする許容と和解を通じて幸福と富を守るという筋書きに、キリスト教的心靈主義の精神が現れている。小冊子の『詩集』(*Ljóðmæli* 1893)もある。1944年には『全集 I-VI』(*Ritsafn I-VI*)が刊行された。

エイナルの作品には、「罪の許し」と「和解」を奉じる者が報われるという楽観主義的な展開が共通して見られる。しかし、これは反面、社会的正義を

不問に伏し、物質的な富を宗教心と結びつけるブルジョワ的道德観に陥る危険をはらんでいた。エイナルは次章で述べるヨウン・トレイスティとともに1920年代頃まで最も有力な作家と仰がれ、23年にはノーベル文学賞の候補者にも選ばれた。しかし、そのころになると、シーグルズル・ノルダルなどの新ロマン派の知識人から、時代遅れのヒューマニズムとして批判の矢面にも立たされるようになった。

今日、エイナルの最良の芸術性は、写實的描写と心理的共感にあふれた短編にあると言われる。その多くは、1901～13年に刊行された3巻の短編集にまとめられている。^{ままはは}継母からつらい仕打ちを受け続けた幼い少女が継母の死にさいして、虐待から解放された安堵から魂の行く末を案じる気持ちに転じ、真夜中に亡骸に讃美歌集を添えるという筋の『罪の許し』(*Fyrirgefning* 1901)は、エイナルの信条を代弁する愛すべき小品である。北米大陸に渡る息子夫婦に残された老母の悲哀をつづった『別れ』(*Skilnaður* 1901)、小農民の生活苦のひとこまを描いた『干し草作り』(*Purrkur* 1905)、身寄りのない子供の運命を扱った『里子』(*Vistaskipti* 1908～09)と『マリアージュ(トランプ遊び)』(*Marjas* 1908)、地上に堕ちた若い天使と純真な娘との交流をめぐる『望み』(*Óskin* 1913)などは、今日でも学校の教科書に採用される。そこでは自然主義的な問題意識が弱者への暖かい宗教的眼差しとなって、作品全体を覆っている。

総じてエイナルの文学は中庸を得て穏やかであり、洗練さと教養にあふれている。当時の教会を硬直した教条主義から解き放ち、人々から苦難にたいする不安を除き、とりわけ道德教育への貢献が大きかった。

6. 自然主義文学の興隆——無学の北アイスランド人作家たち——

6.1. もうひとつの自然主義文学の系譜

近代アイスランドのエリート階級にとって、コペンハーゲン大学への留学

はキャリア開始の重要な第1歩だった。ここまで扱った啓蒙主義以降の作家たちのほとんどは、コペンハーゲン大学留学を経験し、祖国で要職に就いた知識人である。一方、貧しい家庭に育った人々の中には、本国に残って祖先伝来の生業を営みながら創作活動を行った作家たちがいた。その代表は、十分な教育を受けず、独学で教養を身につけた主として北部、すなわち北アイスランドの出身者たちである。故郷とその周辺のみわめて狭い地域に留まって、生涯を終えた例も少なくない。ここでは、ハウルマル・ヨウンソンとそれに続くシングエイインガルたちの生涯と作品を紹介しよう。

6.2. ハウルマル・ヨウンソン——時代を先駆けた自然主義民衆詩人

ロマン派の時代にあって、民衆詩人であると同時に、時代を先駆けた特異な自然主義詩人にハウルマル・ヨウンソン (Hjálmar Jónsson 1796~1875) がいる。北部の中心地アークルエイリ (Akureyri) に近いエイヤフィエルズル (Eyjafjörður) の周辺で育ち、1820年以降はその西側のスカガフィエルズル (Skagafjörður) の近辺で生涯、農業を営んだ。15年間を過ごしたボウラ (Bóla) の土地にちなんで、ボウル・ハウルマル (Bólu-Hjálmar, 「ボウラのハウルマル」の意味) の愛称でも呼ばれる。生後、実母の手を離れて育てられ、14歳で養母をなくし、学校教育を受けられず、独学で教養を身につけた。成人してからは、7人の子供を残して最愛の妻に先立たれ、左手の麻痺に苦しんだ。不当な窃盗容疑をかけられ、家宅搜索を拒んでボウラの自宅を焼き払い、人々から忌み嫌われ、生活庇護の嘆願も拒まれて、極貧の生活を余儀なくされ続けた。社交下手で激しい気質の持ち主であり、当地に赴任していた前述のロマン派詩人ビャルトニ・トゥラレンセンからも嫌われていたと言われる。

幼少のころから詩才に恵まれ、即興詩の提供と引き換えに食物を得ることもあったが、高齢になって作品として発表し始め、その多くは『詩集』 (*Ljóðmæli* 1879) をはじめ、『全集 I-V』 (*Ritsafn I-V* 1949) として死後に出版された。辛辣な社会批判の詩が多いが、それは自身の窮乏生活^{しんらつ}の率直な感情吐露と言うべきものである。ただし、真髄はあくまで民衆文化に根ざ

した素質にあった。民間伝承を渉猟して古語の詩法を身につけ、前述のシーグルズル・ブレイズフィエルズと並ぶリームルの継承者としても重要である。

次に『人の死』を紹介しよう。原文は全行が -öld による脚韻で統一され、短詩行の 1～4 行が 4 つの揚音部 (=強勢) を持つ。1 行目 2 回と 2 行目最初を合わせた f- による頭韻 (*fara fjöld, feigðin*)、2 行目末の *köld* をはさんで 3 行目 3 回と 4 行目最初を合わせた k- による頭韻 (*kem ... kannske ... kvöld, klofinn*) で 4 行のまとまりを形成している。それに 4 行目末の語と合わせて、s- による 4 回の頭韻を踏んだ 6 つの揚音部を持つ半長詩行の 5 行目がさらに加わっている。

人の死 ヒャウルマル・ヨウンソン
(*Mannslát* Hjálmar Jónsson)

俺の仲間は皆 逝く定め
死神が容赦無くさらって行く
俺も逝くさ 今夜にでも
壊れた兜 砕けた盾
擦り切れた鎧 折れた剣 罰の借りの山を背負って

Mínir vinir fara fjöld,
feigðin þessa heimtar köld,
ég kem eftir, kannske í kvöld,
með klofinn hjálm og rifinn skjöld,
brynju slitna, sundrað sverð og syndagjöld.

ヒャウルマルは当時のロマン派の観念的な国民主義から一線を画していた。ロマン派の詩人たちが祖国の自然の美しさを賛美する詩をこぞって作ったのにならして、ヒャウルマルはこれを虚飾なく醜惡に描いた。前述のビャルトニ・トウラレンセンが啓蒙主義の詩人エグギエルト・オウラフソンにな

らって、祖国を崇高な精神を湛える「美しい山の淑女」にたとえ、その創造力を^{たた}えたとのいたして、ハウルマルはそれを痩せ衰えた老婆になぞらえ、哀れみを込めて活写した。同類の詩を書いたのは、女性作家ユーリアナ・ヨウンスドゥフティルのほかに例を見ない。前述のロマン派詩人マハティアス・ヨホクムソンが『頌歌』を献呈したアイスランド建国千年祭の折に、ハウルマルが寄せた詩の一節を紹介しよう。原文では4つの揚音部を持つ各行を重ねた4行のまとまりを2つ合わせた形式を取り、脚韻のほかに、2行ごとに奇数行2回と偶数行最初の揚音部を合わせて、3回の頭韻を踏んでいる：1～2行目 b-(beinaber, brjóstin), 3～4行目 h-(hraunin hér, hörðum), 5～6行目 k-(Kóróna ... kaldur, klömbur), 7～8行目 þ-(þrautir ... þúsund, þekkir)。

アイスランドは1874年に国王をシングヴェトリルに出迎える (抄)

ハウルマル・ヨウンソン

(*Ísland fagnar konungi sínum á Þingvelli 1874* Hjálmar Jónsson)

ご覧あれ かくも痩せ細った身の上を	Sjá nú, hvað ég er beinaber,
胸は ^な 萎え 頬は色褪 ^あ せ	brjóstin visin og fölar kinnar,
硬い当地の溶岩の衣が	eldsteyptu lýsa hraunin hér
この命を締めつける始末	hörðum búsifjum ævi minnar.
しばれる氷雪が王冠の代わり	Kóróna mín er kaldur snjár,
流水のかけらが我が宿り	klömbur hafísa mitt aðsetur,
千年の間 味わった辛酸の数々は	þrautir mínar í þúsund ár
神のみぞ しかとご存知	þekkir guð einn og talið getur.

ハウルマルはすぐれた彫刻家でもあった。精緻な意匠を凝らした木彫りの作品は、レイキャヴィークの国立博物館 (Þjóðminjasafn) に展示されている。

6.3. シングエイインガル ― 北部の自然主義作家たち

北部の生活に根ざした自然主義作家として、次の3人を代表とするグループがあった。詩も書いているが、一般に小説家として知られている。出身地は北部の中心地アークルエイリ（Akureyri）の東側に位置するシングエイヤルシスラ（Þingeyjarsýsla）である。正確には南北に分かれるが、これにちなんで「シングエイヤルシスラの出身者たち」を意味する「シングエイインガル」（Þingeyingar）と呼ばれる。その3人とは、ソルギルス・ギャトランディ、グヴズムンドゥル・フリジヨウンソン、ヨウン・トレイスティであり、1890年代に作家としてデビューした。出身地を同じくするだけでなく、正規の教育を十分には受けて、ほとんど独学で文学的素養を身につけ、農業や印刷業を正業とするかたわら作品を書いた。そのうちヨウン・トレイスティを除く2人は、生涯、北部の故郷を離れることなく暮らした。とりわけソルギルス・ギャトランディは、講演でアイスランド全土を回った経験があるグヴズムンドゥル・フリジヨウンソンと違って、まったく北部を離れたことがない。決して広くない世界観に由来する限界はあるものの、極北の遠隔地にあって限られた社会状況から題材を拾い、ヨーロッパ文学の潮流にあずかる文学活動を営んだ事実には、目を見張る思いがする。

シングエイインガルたちの文学への関心は、とりわけ友人のベーネディフト・ヨウンソン・アウ・エイズヌム（Benedikt Jónsson á Auðnum 1846～1939）を通じて^{つちか}培われた。ベーネディフトは深い教養を備えた人物で、独学で英独仏語と北欧諸語を習得し、1888年には友人ら約20人と図書の収集を始め、当時のアイスランドの田舎には珍しい図書館を設立し、後には雑誌も発行した。新ロマン派の女性作家フルダはその娘である。シングエイインガルたちはベーネディフトのもとで書物に親しみ、ノルウェー人作家やスウェーデンの文豪アウグスト・ストリンダベリ（August Strindberg 1849～1912）などの当代のヨーロッパ文学、ダーウィン、マルクスなどの思想について広範な知識を獲得し、大きな感化を受けた。

6.4. ソルギルス・ギャトランディ ― 最初の自然主義長編小説作家

ソルギルス・ギャトランディ (Þorgils gjallandi 1851～1915) は本名をヨウン・ステーフアウンソン (Jón Stefánsson) という。「ギャトランディ」は「叫ぶ、響く」という意味の動詞 *gjalla* の現在分詞で、「叫ぶ者、響く者」という意味の筆名である。南シングエイヤルシスラ (Suður-Þingeyjarsýsla) の景勝地として有名なミーヴァハトン (Mývatn) 湖畔のスクートゥスターシル (Skútustaðir) で生まれ、9歳で母親を亡くし、16歳のときには父親がミーヴァハトンで水死した。1877年に結婚し、89年に近郊のリヒトラストレンド (Litlaströnd) に農場を構えるまで、文学好きの伯父のもとなどで下男として働いた。仕事で、ひと夏を北部の西寄りのフーナヴァスシスラ (Húnavatns-sýsla) で過ごした以外、終生この地に住み、独力で農業を営んだ。アイスランドのほかの地方の町にさへ行ったことがない。学校教育はまったく受けておらず、すべて独学である。

ソルギルスの作風は他の自然主義作家と共通して、聖職者や世間一般の偽善への痛烈な批判を展開するもので、男性的な乾いた文体を特徴とする。抗しがたい盲目的な男女の愛情を題材に、すぐれた作品を残した最初の作家でもある。処女作『田園から』 (*Ofan úr sveitum* 1892) はその特徴をよく示す短編集で、以下で紹介する『教会詣で』のほかに短編2つと中編1つを含む。40歳で文壇に登場し、農作業の余暇に執筆活動を行ったために作品数は多くないが、代表作で唯一の長編小説『滝の上で』 (*Upp við fossa* 1902) は、アイスランド文学史上、最もセンセーショナルな作品となった。前述のヨウン・トウロドセン以来の本格的な長編小説で、最初の自然主義長編小説とみなされる。農夫の息子である青年が貧しい男の素朴な人妻と恋に陥るが、世間的体裁を重んじて感情を抑える人妻の判断に屈し、裕福な牧師の教養豊かな娘と新たに親しい仲になる。牧師の娘は世間と両親の批判に逆らい、階級の差を越えて青年と関係を持ち、ともに生きる決意をする。ところが、その後、青年自身が牧師の隠し子であるという事実が牧師の証言から判明するという筋書きである。情感あふれる文体と深い心理描写を特徴とする画期的な作品だが、近親相姦を扱った点で前例がなく、性的描写と牧師の偽善への批

判を大胆に行ったために、主婦を筆頭とする一般読者や教会関係者の間で物議を醸し出した。前述のエイナル H. クヴァーランも粗野な作品と酷評している。しかし、これには人々の問題意識を高めようとするソルギルスの意図があった。

ほかには、他の自然主義作家と共通して、動物を扱った短編を残している。読者の人気を得たのもこのジャンルである。人間と動物の触れ合いを扱い、馬にかんするものが多い。『灰の炎』(Fölskvi 1890)は馬の虐待を描いた初期の佳作である。有名なのは『望郷』(Heimprá 1909)で、翻訳も多い。故郷の雄馬や子馬のことが忘れられず、長く険しい帰郷の途上で足を折り、息絶えたまま凍結した姿を後世にさらした雌馬スティヤルトナ(Stjarna)——「星」の意味——の一途な気持ちを称えた小品である。ソルギルスは前章で述べたソルステイトン・エルトリングソンと交流するなどして、晩年までのジャンルの創作を続けた。最後の短編集『動物物語』(Dýrasögur 1910)には、それまでに書いた12編が収められている。新聞、雑誌にもたびたび論評を掲載し、北欧諸国の作家の短編も数多く翻訳した。1945年には『全集 I-IV』(Ritsafn I-IV)が刊行された。

6.5. グヴズムンドゥル・フリジヨウンソン——農民社会の伝統を擁護した保守派

グヴズムンドゥル・フリジヨウンソン(Guðmundur Friðjónsson 1869～1944)は南シングエイヤルシスラ(Suður-Þingeyjarsýsla)、アーザルダールル(Aðaldalur)のシーラライクル(Síðlækur)に生まれた。近郊のサンドゥル(Sandur)に居を構え、12人の子供をかかえて生涯、農業を営んだ。新設のメズルヴェトリル実科学学校(Möðruvallaskóli)で2年間、教育を受ける機会に恵まれたが、それ以外は独学である。後年には、アイスランド全土に講演に出かけた経験がある。創作活動は農作業の合間に行ったが、10巻の短編小説集、1編の長編小説、4巻の論説集、5巻の詩集を残した多作家である。ソルギルス・ギャトランディと同様に、動物にちなんだ短編集も残している。

グヴズムンドゥルは急進主義者として登場し、教会や聖職者、硬直した因習を攻撃した。女性の主人公の名前を冠した唯一の長編小説『アウスのオウレヴ』(*Ólöf í Ási* 1907) では、愛を欠いた結婚を描くことで個人の自由を弁護し、性的描写も厭わなかった。しかし、その急進主義的性格は徹底したものではなく、やがて保守性を強く示すようになる。政治・社会論争に関与し、新聞・雑誌への投稿も積極的に行ったが、その視点は郷土の農民の伝統的な生活に深く根ざしたもので、けっして広いとは言えない。都市文化を蔑視し、1907年の義務教育の導入にたいしては、社会を蝕む^{むしば}として反対意見を表明したほどである。作品においては、狭いながらも現実性あふれる当時の農民の勤勉さ、思慮深さ、忍耐強さを力強く肯定的に描いた。端的な例は、詩作品として初めて好評を得た3巻目の『詩集』(*Kvæði* 1925) に収められ、厳しい現状から逃避せずに、ひとり忍耐を貫く古来の農民社会の美德を称えた『川辺の未亡人』(*Ekkjan við ána*)に見られる。社会的正義感と自己にたいする厳しき、近代西欧文明に追従する態度への戒めが、基本的姿勢として作品の随所にうかがえる。題材には実際の個人的体験に基づくものが少なくない。以下に紹介する『古い干し草』もその一例である。外国文学よりも自国のサガの伝統を重んじ、初期のハルドウル・ラハスネスの政治的イデオロギーを帯びた作品を痛烈に批判した。簡潔で男性的な文体を特徴とし、この点では当時のアイスランド人作家の典型と言える。後年は自然主義から遠ざかって国民主義的ロマン派の理念に近づき、宗教性を帯びて神秘主義的傾向を示し、後述する新ロマン派の巨匠エイナル・ペーネディフツソンの賞賛を浴びるまでになった。1950年には作家として名を成した2人の息子のひとりで、詩人のソウロッドゥル・グヴズムンソン (*Þóroddur Guðmundsson* 1904～83) による伝記が刊行され、1955～56年には『全集 I - VII』(*Ritsafn I - VII*) が編まれた。

なかでも、厳しい寒波に見舞われた地方の困窮と人々の葛藤を描いた『古い干し草』(*Gamla heyð*) は1909年に書かれ、短編集『12の物語』(*Tólíf sögur* 1915) に収められた有名な短編である。サガの叙事的な文体を継承し、簡潔で力強く劇的な筆致で、事態の推移と人々の意見の応酬と自然描写を巧みに

配列して、伝統的な農民の気質を彷彿^{ほうふつ}とさせる。東京のアイスランド大使館にも、この作品にちなんだ絵画が飾られている。題材は1881～82年の冬に襲った大寒波から取ったと言われている。後述するヨウン・トレイスティの『高地の農場』の終末部分もこれを題材にしている。作者自身、たび重なる寒波と飢饉に襲われた1880年代に病気がちの少年時代を過ごし、若死にするのではないかと予感していたと伝えられる。

6.6. ヨウン・トレイスティ ― 長編小説の発達に貢献した多作の物語作家

ヨウン・トレイスティ (Jón Trausti 1873～1918) は北シングエイヤルシスラ (Norður-Píngeyjarsýsla) の最北、北極圏のメルラハカスリエクタ (Melrakkaslétta) のリーヴ (Rif) に生まれた。本名をグヴズムンドゥル・マグヌソン (Guðmundur Magnússon) という。5歳で父親をなくし、何ら教育を受けず、飢えと寒さの毎日を送る極貧の中で育った。16歳で家を出て漁業などで生計を立てたが、偶然、手に入れたサガなどの書物を貪るように読み、20歳のときに東部のセイジスフィエルズル (Seyðisfjörður) で印刷術を学ぶ決心をした。コペンハーゲン (1897～98) でも修行を積み、1898年以降、レイキャヴィークで印刷業に携わった。30歳ころまでに詩と戯曲を発表したが、不評のため、1918年に大流行したスペイン風邪で他界するまで、ヨウン・トレイスティの筆名で小説を書いた。

ヨウンは成人するまで正規の教育を受けなかったが、前述のソルギルスとグヴズムンドゥルに比べて広い視野を持っていた。1903年には初期の歴史劇で政府から奨学金を得て、ドイツ、スイス、イギリスへ旅行した経験があり、コペンハーゲン時代には演出法を学んで、レイキャヴィークの演劇協会で活躍した。広範なジャンルに大量の作品を残した多作家であり、前章で述べたエイナル H.クヴァーランとともに長編小説の発展に多大な貢献を残した。中庸と教養に裏打ちされたエイナルとは対照的に、生き生きした詩的想像力と視覚的な描写が息づく作品は、同時代の作家たちの中で今日でも最も読まれることが多い。

初期の代表作は、自らの体験に題材を求めた長編小説『ハトラ』(Halla

1906)と続編の『荒地の農場 I-IV』(*Heiðarbýlið I-IV* 1908~11) 全4巻である。これは1860~70年代、高原の荒地(heiði)に立つ一軒家の農場を舞台として、極限状況下の人々の厳しい生存の闘いを描写し、急激な社会変化の下での伝統的な生活を擁護したものである。前者では、既婚の身を隠した牧師の誘惑に乗って、子供を生み落とした主人公の女性ハトラが、ある農夫とともに高原の荒地に立つ一軒家の農場に身を寄せて、生計を営むまでが描かれる。後者の続編では、両親の反対に逆らって、ハトラの農場に身を寄せた農夫の恋人が産褥の床で命を落とす過程と、1881~82年の大寒波の中で、ハトラと残された子供たちの生存の苦闘と新興の町への移住が描かれている。

ヨウンは当時の社会状況を作品のモチーフとしたことでも知られている。その代表作には、最後のデンマーク人貿易商と新興の商業組合との競合を貧しい農夫の娘の生涯を通して描いた『雪解け』(*Leysing* 1907)、伝統的な国民教会と自由な信仰組織との対立を扱った『城郭』(*Borgir* 1909)がある。ただし、大方の予想とは裏腹に、いずれの作品でもヨウンは伝統を擁護する立場に立っている。旧来の独占貿易の弊害を除去して慣習を守ろうとするデンマーク人商人に同情し、浅薄で非道徳的な新しい信仰組織に反対して、反民主主義的とも見える姿勢を貫いている点で、非常に保守的である。

1912年以降はロマン派的傾向を強め、祖国の歴史に題材を求めた。1783~84年の「霞の大飢饉」による大災害を題材に取った『ラーキ火山大噴火の物語 I-II』(*Sögur frá Skaftáreldi I-II* 1912~13)が好例である。18世紀の「炎の牧師」、ヨウン・ステイングリムソンによる体験記に基づき、1881~82年の飢饉での自身の経験を織り交ぜて、人々の生きる力を称えている。『名門の家系 I-II』(*Góðir stofnar I-II* 1914~15)は中世末期から宗教改革期のアイスランドを舞台に、身分の高い貴婦人をめぐる合計4つの小説から成る。その中のひとつ、『ストウラボルグから来たアンナ』(*Anna frá Stóruborg* 1914)は16世紀の民話に素材を取り、周囲の圧力と慣習に逆らって身分の低い年下の男性と結ばれる高貴な女性アンナ(Anna)を描いている。

短編にも傑作が多く、長編と違って時代設定を伴わず、想像力をかきたてて内容を特徴とする。海岸に巣を作る鳥の卵を狙う雌キツネを追い払うこと

に情熱を注ぐ男を描いた『見張り』(*Á fjörunni* 1906), 『フリゲート艦に乗っていたころ』(*Pegar ég var á fregátunni* 1910) などが名高い。ヨウンが残した短編は、2巻の『短編集 I-II』(*Smásögur I-II* 1909/12) と没後に編まれた『作品集』(*Samtningur* 1920) にまとめられている。

いささか粗野で冗長とも言えるヨウンの語り口は、新ロマン派のエイナル・バーネディフツソンやシーグルズル・シーグルソンから芸術性に欠けるとして非難を浴びた。また、最晩年の作品では保守主義が過激さを増して、かつての精彩さを失い、エイナル H. クヴァーランと同様に名声に陰りが生じた。しかし、すぐれた物語作家として、後述するグヴズムンドゥル G. ハーガリーンやハルドウル・ラハスネスの先駆者として位置づけられる。1939～46年には『全集 I-VIII』(*Ritsafn I-VIII*) が編まれた。

6.7. 自然主義と新ロマン派の間——心理描写と人生哲学による人間観察

自然主義の作風を受け継ぎながら、後述する新ロマン派という新しい文芸思潮への流れの中にあって、個性的な作品を残した作家たちがいた。社会的正義感や批判精神を前面に押し出すのではなく、日常生活の諸相に焦点を当て、個人の内面を掘り下げて、心理描写と人生哲学を通じて人間観察に徹した作家たちである。ここではほぼ同年のソウリル・ベルフソンとヤーコブ・トウラレンセンを短編小説家としての観点から紹介しよう。2人とも早くから文壇に登場したが、本格的に散文作品を発表したのは比較的遅く、ソウリルは50代前半、ヤーコブは40代前半のことである。

6.8. ソウリル・ベルフソン——冷静沈着な心理描写の達人

ソウリル・ベルフソン (Þórir Bergsson 1885～1970) の筆名で作品を発表したソルステイトン・ヨウンソン (Þorsteinn Jónsson) は、西部のミーラシスラ (Mýrasýsla) のやや内陸寄り、ノルズルアウルダールル (Norðurárdalur) のクヴァンムル (Hvammur) に牧師の息子として生まれ、北部のスカーガフィエルズル (Skagafjörður) のマイリフェトル (Mælifell) の教会で20歳を過ぎるまで育った。幼少のころから牧師の父親に十分な教育

を受け、後には独力で外国語を学んだ。1907年にレイキャヴィークに出たが、病弱のために高等教育を受けることを断念し、郵便局に勤めた。1914年にアイスランド銀行 (Landsbanki Íslands) に移り、29年間、奉職して要職に就いた。作家活動は銀行勤務の合間に行ったものである。1912年から雑誌に短編を発表し始めたが、単行本にまとめられたのは、50歳を過ぎた1939年に世に出た『短編集』(Sögur)が最初である。それ以後、ソウルルの名は有名になり、ほかに短編集4冊、長編2冊、詩集1冊を残している。1965年には『全集 I-III』(Ritsafn I-III)がグヴズムンドゥル G. ハーガリーンの手で編まれた。

ソウルルはとくに短編小説に才能を発揮した。日常の出来事を1人称の語り手の視点から物語るものが多い。語り手は話の中心には位置せず、距離を置いた客観的な立場に立ち、抑えめな筆致で登場人物の性格や心理状態の鮮明な描写がなされる。ほぼ同年のヤーコブ・トゥラレンセンと違って、ユーモアやペーソスとは無縁であり、簡素で冷徹な筆致を特徴とし、内面に潜む真の姿を意外な展開で浮き彫りにする。総じて自然主義的な傾向が強い。弱者を扱うこともあるが、同じく短編小説の名手ハルドウル・ステーファウンソンと違って、社会批判や政治的関心は薄い。国民主義的な思い入れも希薄で、冷静な心理描写に徹している。1912年に代表的な文芸雑誌『スキルトニル』(Skírnir)に発表した処女作『シグガ・グンナ』(Sigga-Gunna)は、侮蔑された老女シグガ・グンナのみじめな姿を語り手の立場から描いた短編で、その後も変わることがなかったソウルルの作風を良く伝えている。

6.9. ヤーコブ・トゥラレンセン——ペーソスとユーモアの人生哲学者

ヤーコブ・トゥラレンセン (Jakob Thorarensen 1886～1972) は北部の西フーナヴァスシスラ (Vestur-Húnavatnssýsla)、フルータフィエルズル (Hrútafjörður) のフォッス (Foss) に生まれ、その周辺で育った。木工技術を身につけ、19歳のときにレイキャヴィークに出てからは、大工として働き続けた。学校教育はまったく受けておらず、すべて独学である。早い時期に家を建て、自宅の書庫に文献を集めて勉学にいそしんだ。外国語を自修し、

北欧諸国を旅したこともあるが、もっぱら祖国のアイスランド作家を模範とした。

ヤーコブはロマン派詩人で家系を同じくするビャルトニ・トウラレンセンをはじめ、グリームル・トムセンやエイナル・ベーネディフツソンの影響を受けて、詩人として出発した。20代の終わりに発表した処女作『雪明かり』(*Snæljós* 1914)をはじめ、最後の『夜の冷氣』(*Náttkæla* 1966)まで10冊の詩集を数える。故郷の厳しい生活環境の中で培われた男性的で現実的な作風が色濃く、叙情性よりも理知的な傾向を示すエピグラム風の詩が多い。そのほかは未刊の戯曲1編を除いて、すべて短編集である。最初の短編集『飛翔する時』(*Fleygar stundir* 1929)は最初の詩集から15年後に刊行された。以後、『軽薄な時代』(*Léttstígg öld* 1966)まで全部で7冊を数える。短編作家としてのヤーコブは自然主義的な作風を基調としながら、社会批判や政治的問題意識は希薄で、時代の風潮とは一線を画した。そして、日常の劇的場面を題材とし、皮肉とペースとユーモアを伴った飾り気のない人生哲学を展開した。古風な文体と題材によりながらも、広く大衆に受け入れられ、後年は文筆活動に専念できた。アイスランド自然主義文学の最後の作家とも言われる。

7. 外国語で作品を書いた作家たち——ヨーロッパ文学の舞台へ——

7.1. 母語によらない創作の試み

コペンハーゲン大学留学や北米大陸への移住の波の中で、近代アイスランド人作家の多くが海外で活躍したという事実は、これまで述べてきたとおりである。その中で、20世紀初頭、とくに1910～30年代にかけて、あえて本国を離れてアイスランド語以外で作品を発表した人々がいた。その目的は人口10万人足らずの祖国と言葉の枠を離れ、広くスカンジナビア全体に認められようという願望だった。デンマーク語で戯曲を中心とする作品を書いたヨ

ウハン・シーグルヨウンソンとグヴズムンドゥル・カンバンが初期の代表である。1910年代にはアイスランド文学史上、初めて戯曲が中心的位置を占めた。そして、後続のすぐれた作家たちの努力によって、アイスランド文学は初めてヨーロッパ文学の土俵に上がるようになった。以下では戯曲の文学史的概観から始めよう。

7.2. インドリージ・エイナルソン ― 近代戯曲と劇場組織の創始者

戯曲は長らくアイスランド文学の主要潮流とはならなかった。18世紀に南部のスカウルホルトのラテン語学校の簡素な野外劇場で上演されたと伝えられる学校劇を別にすれば、18世紀末のシーグルズル・ピェートウルソン以降、マハティアス・ヨホクムソンの『追われたる者たち』、女性作家ユーリアナ・ヨウンスドウフティルの『キャルタン・オウラフソン殺し』など、わずかな例を数えるのみである。これには市民社会が未成熟で、劇場としての建物がなかったという外的要因も関係している。

1897年、ようやくインドリージ・エイナルソン (Indriði Einarsson 1851～1939) によって「レイキャヴィーク演劇協会」(Leikfélag Reykjavíkur) が結成された。自然主義作家エイナル H. クヴァーランの戯曲『他者の罪』も、同協会との関係で初演された。インドリージは北部の出身で、コペンハーゲン大学でアイスランド人として初めて経済学を修め、統計学と経済学の専門家として祖国で要職を歴任した。65年に及ぶ創作活動の中で数々の作品を残し、最初の戯曲専門の作家とみなされている。初期の成功作には、ヨウン・アウルトナソンによる民話集に題材を取った1871年初演の妖精譚『大晦日の夜』(*Nýársnóttin* 1872) と1873年初演の無法者譚『地獄に落ちた人々』(*Hellismenn* 1897) がある。晩年の『フリーニの舞踏』(*Dansinn í Hruna* 1921) は、老牧師が息子の命と引き換えに教会を建設する契約を悪魔と結び、息子は約束を果たすべく、クリスマスの晩の集いで教会が地中に沈むまで踊り続けるという筋書きの傑作である。その中に収められた『アヴェ・マリア』(*Ave María*) は美しい宗教詩で、シグヴァルディ S. カルダロウンスの作曲で歌曲としても知られている。

インドリージは公職を退いた後、未刊行ながらシェイクスピアの戯曲を14編翻訳した。1923年には国立劇場 (Þjóðleikhúsið) の建設計画にも着手したが、こけら落しは第二次大戦期の混乱を経た1950年まで延期された。戦時中、劇場の建物はイギリス軍の倉庫として使用されたのである。

7.3. ヨウハン・シーグルヨウンソン — 国際的名声を得たデンマーク語劇作家

戯曲の分野で初めて海外で名声を得たのは、ヨウハン・シーグルヨウンソン (Jóhann Sigurjónsson 1880～1919) である。北部の南シングエイヤルシスラ (Suður-Pingeyjarsýsla), アーザルダールル (Aðaldalur) のラハサミーリ (Laxamýri) の裕福な農家に生まれ、レイキャヴィーク・ラテン語学校を経て、19才でコペンハーゲンに渡り、獣医学を学んだ。その後、文学に転じ、文芸批評家ブランデス (5.1.参照) とドイツの哲学者ニーチェを奉じるノルウェー人のボヘミアン・サークルに交わった。作家活動だけで生計を立てたアイスランド人作家の初期の世代に属する。ノルウェーの劇作家ヘンリック・イブセン (Henrik Ibsen 1828～1906) を敬愛し、スカンジナビア全土で名声を得るべくアイスランド語とデンマーク語で作品を書き、おもにデンマーク語版を出版した。

ヨウハンは1908～09年にアイスランド文学初の自由詩『悲しみ』 (*Sorg*) などを書き、初期の戯曲でイブセンと並ぶノルウェーの文豪ビェーンステューネ・ビェーンソン (ビョルンソン Bjørnstjerne Bjørnson 1832～1910) の目に留まって激励を受けた。とりわけ大きな成功を収めたのは、18世紀の祖国の民間伝承にヒントを得た次の2作である。まず、デンマーク語版『山のアイヴィンとその妻』 (*Bjærg-Ejvind og hans Hustru* 1911) — アイスランド語版『山のエイヴィンドゥル』 (*Fjalla-Eyvindur* 1912) — は生存の闘いと盲目の愛情の葛藤を描いた代表作である (年号は出版年, 以下同様)。谷間の裕福な農場の未亡人ハトラ (Halla) は、作男として雇った犯罪者エイヴィンドゥル (アイヴィン) と恋に落ちる。周囲に素性が知れると、ふたりは荒涼とした高地の荒野に駆け落ちする。ハトラはそこで娘を宿し、つかの間の

幸福な生活を送る。しかし、やがて追っ手が近づくと、その追跡から逃れるために3歳の娘を滝の中に投げ入れ、ふたりはさらに山の奥深くに逃亡する。そこでふたりは冬の寒さと飢餓に苦しみ、猛吹雪の中で引き裂かれて、ついに息絶えるという筋である。この作品はブランドスに年間最優秀作品として激賞された。1911年のレイキャヴィーク初演に続いて、1912年にはコペンハーゲンでも披露され、海外で初めて上演されたアイスランドの戯曲となつて、スカンジナビア全土で圧倒的な成功を収めた。第一次大戦をはさんでドイツ、イギリス、アメリカでも好評を博した。スウェーデンでは1917年に映画化され、スウェーデン映画史に残る名作ともなった。

もうひとつの傑作、デンマーク語版『渴望』(*Ønsket* 1915) — アイスランド語版『魔術師ロフトゥル』(*Galdra-Lofthur* 1915) — は1914年にレイキャヴィーク、1915年にコペンハーゲンで初演され、ゲーテの『ファウスト』に類似したテーマを扱っている。北部のハウラルのラテン語学校生ロフトゥルは悪魔に魂を売って、無限の力を得ようとする。しかし、誘惑され、自ら命を絶った少女と牧師の娘との狭間に立ち、人間の能力を超えた未到達の境地への強い憧れと幻覚に引き裂かれて、教会の中で魔術を行使する場面で息絶えるという物語である。いずれの作品も緊迫した感情表現と心理的葛藤、新ロマン派的な叙情性と象徴性に富み、従来のアイスランド文学にはなかった魅力を湛えている。ほかにも3編の戯曲を残したが、当時、流行していた肺結核を患って惜しくも夭折した。

一般にヨウハンの戯曲は構成力が比較的弱く、社会的問題意識も強くない。しかし、アイスランドの伝統的な民間伝承が舞台芸術として演出された出来事は、海外では非常に斬新だった。この点でインドリジ・エイナルソンの流れを汲んでいると言える。1940～42年には、後述するグンナル・グンナルソンが序文を寄せた『全集 I-II』(*Ritsafn I-II*) が編まれた。

それでは次に、アイスランド語版『山のエイヴィンドゥル』から有名な子守歌を紹介しよう。エイヴィンドゥルが2人の子供に歌って寝かしつけるのをハトラが耳にする場面に用いられるもので、憂愁を湛えた素朴で美しい民謡の調べに乗せて、アイスランド人ならだれでも知っている子守歌になって

いる。

お眠りなさい 愛^{いと}しい子 ヨウハン・シーグルヨウンソン
(*Sofðu, unga ástin mín* Jóhann Sigurjónsson)

お眠りなさい 愛しい子	Sofðu, unga ástin mín,
外は悲しく降りしきる雨	— úti regnið grætur.
お母さんは玩具 ^{おもちゃ} を片づけます	Mamma geymir gullin þín,
古い骨の棒や小箱もみんな	gamla leggi og vóluskrín.
暗い夜に起きていてはだめ	Við skulum ekki vaka um dimmar nætur.

測り知れない闇の力	Það er margt sem myrkrið veit,
重く沈む私の心	— minn er hugur þungur.
黒い砂が緑の草地を	Oft ég svarta sandinn leit
焼き尽くす記憶の数々	svíða grænan engireit.
溶岩の亀裂の淵 ^{とどろ} に轟く音	Í jöklinum hljóða dauðadjúpar sprungur.

お眠りなさい 安らかに	Sofðu lengi, sofðu rótt,
起きるのは遅くていい	seint mun best að vakna.
薄日がやがて沈むころ	Mæðan kenna mun þér fljótt,
辛さが教えてくれる 人は皆	meðan hallar degi skjótt,
愛して失い 泣いて惜しむのを	að mennirnir elska, missa, gráta og sakna.

7.4. グヴズムンドゥル・カンバン — 悲劇的最期を遂げたデンマーク語作家

ヨウハンの成功は他のアイスランド作家に大きな刺激を与えた。前述のエイナル H. クヴァーランが戯曲に手を染めたのも一例である。しかし、その最大の後継者は劇作家・小説家のグヴズムンドゥル・カンバン (Guðmundur Kamban 1888～1945) である。グヴズムンドゥルはレイキャヴィーク近郊の貧しい農家に生まれ、北西部に育ち、レイキャヴィーク・ラテン語学校に通

いながら新聞社で働いた。1910～14年にコペンハーゲン大学で哲学と文学を専攻した後、演出家として劇場関係の仕事に就いて、劇作家・小説家として活躍した。1915～17年にニューヨーク、27年までコペンハーゲン、33年まではレイキャヴィークに住んだ。作品はおもにデンマーク語で書き、アイスランド語訳も交え、自らドイツ語にも直した。作品の多くはドイツ語に訳され、ドイツで好評を得たため、以後、コペンハーゲンとドイツ（ベルリン、ケーニヒスベルク）を往復し、ナチス時代にも平和主義と人道主義を貫いた。しかし、頻繁なドイツとの接触でナチスとの関係を不当に疑われ、狂信的なデンマーク人愛国主義者に射殺されて、悲劇的な最期を遂げた。

グヴズムンドゥルは高い知性と教養を備えた国際人だった。ブランデスの賞賛に浴した処女作『ハッダ・パッダ』(*Hadda-Padda* アイスランド語版・デンマーク語版 1914)は、当時のレイキャヴィークに生きる題名と同名の女性主人公の果敢な生活の苦闘を描き、ヨウハン・シーグルヨウンソンから影響を受けた新ロマン派的色彩の強い戯曲である。しかし、次第に社会的・倫理的問題に関心を移し、アイスランド以外に題材を求めて、欧米の大都市を舞台に一連の批判的作品を書いた。アメリカで第一次大戦の動乱を経験したグヴズムンドゥルは、望まずして罪を犯すに至る人間を犠牲者とみなして、刑罰の不当性を説いた。『大理石』(*Marmor* デンマーク語版 1918)は刑罰廃止を訴える理想に賛同しつつも、それを実践しようとした裁判官を精神病棟に隔離する人々を描いた戯曲である。

グヴズムンドゥルは小説家としてもすぐれ、長編小説『ラグナル・フィンソン』(*Ragnar Finnsson* デンマーク語版 1922)では、題名と同名の知的で繊細な主人公がアメリカの刑務所生活で犯罪者と化す様子を描写している。もうひとつの関心は夫婦関係に向けられた。戯曲『我ら殺人者』(*Vi Mordere* デンマーク語版 1920)は軽薄な妻を殺害するに至った男の葛藤を描いた傑作である。人間は完全無欠ではなく、状況次第でだれもが殺人者となる危険を孕んでいることを説いたもので、グヴズムンドゥルが残した12余りの戯曲中、最高傑作と言われる。ほかにも、歴史小説『スカウルホルト I-IV』(*Skálholt I-IV* アイスランド語版 1930～35, デンマーク語版 1930～

32)が名高い。これは17世紀のアイスランドを舞台に、厳格な牧師を父親に持ち、因習に逆らって恋人と通じた娘の悲劇を描いた4部作で、『スカウルホルトにて』(*Pá Skálholt* デンマーク語版1934)として戯曲にも改作されている。

7.5. ヨウン・スヴェインソン——ドイツ語で『ノンニ』を書いた神父

上述の2人が頭角を現したころ、ドイツ語による児童文学作品で世界的名声を得た作家がいた。ヨウン・スヴェンソン(Jón Svensson)のペンネームで執筆し、ノンニ(Nonni)の愛称で知られたヨウン・スヴェインソン(Jón Sveinsson 1857~1944)である。ヨウンは北部のメズルヴェトリル(Möðruvellir)で8人の兄弟姉妹の4番目に生まれ、7歳になってからは近郊の中心地アークルエイリ(Akureyri)で育った。11歳で父親をなくし、翌年の1870年、北米移住の波の中で例外的に北フランスのアミアン(Amiens)に渡り、イエズス会の神学校で学ぶ機会を与えられた。普仏戦争の余波からコペンハーゲンに滞在することになり、翌年、カトリックに改宗した後フランスに到着した。家族との別れはつらかったが、敬虔な母親は1875年に一家を連れてカナダに移住し、ウィニペグで1910年に生涯を終えた。1878年に神学校を卒業したヨウンは、オランダとベルギーの大学でも哲学と神学を学び、1883~1912年にデンマークのオードロプ(Ordруп)とコペンハーゲンのラテン語学校に奉職した。88~92年にはイギリスに学んでカトリック神父に任ぜられたが、デンマークに戻った。病氣療養でオランダに滞在した後、1914年からはオーストリア西部、フォアアルルベルク(Vorarlberg)のイエズス会の学校に奉職し、22年からはパリで暮らした。執筆活動のかたわら、とくに晩年は世界中を広く旅行してアイスランドにかんする講演を行い、その数は生涯で5,000回にも達した。1930年のアルシング創立千年祭には祖国に招かれて勲章を授かり、アークルエイリの名誉市民となった。同市には記念館「ノンニの家」(Nonnahús)がある。最晩年はドイツのラインラント(Rheinland)地方で暮らし、ケルンで生涯を終えた。48~56年には12巻の『全集I-XII』(*Ritsafn I-XII*)が編まれている。

ヨウンの名前を一躍有名にしたのは、1909～10年に関節炎に苦しみ、デンマークの職を辞して、12～14年に治療のためにオランダのリンブルフ州 (Limburg), エクサーテン (Exaten) で過ごしたときに、1913年にドイツ語で発表した『ノンニ』 (*Nonni*) である (原題はドイツ語, 以下同様)。「ノンニ」はヨウンの愛称だが、同書はアイスランドとデンマークでの少年時代の思い出を織り交ぜた自伝的性格の強い児童文学の傑作である。この成功で本格的な作家活動に入ると、『ノンニとマンニ』 (*Nonni und Manni* 1914), 『晴天の日々』 (*Sonnentage* 1915), 『海辺の町』 (*Die Stadt am Meer* 1922), 『島の冒険』 (*Abenteuer auf den Inseln* 1927), 『スキーパロウンにて』 (*Auf Skipalón* 1928) などを発表し、『ノンニは語る』 (*Nonni erzählt* 1936) で完結を見た。「マンニ」 (*Manni*) はヨウンの弟で、良き理解者のアウルトマン (*Ármann*) の愛称である。1873年からアミアンの神学校でヨウンとともに学んだが、85年、ベルギーのルーヴァン (Louvain) 大学に在学中、23歳で夭折した。

「ノンニ」をめぐる連作は、カトリックの道德観とヒューマンイズムに貫かれた児童文学の傑作として、カトリック文化圏の国々を中心に30以上の言語に訳されている。日本語訳はキリスト教児童文学作家の上沢謙二訳『ノンニ兄弟の冒険』 (1937, *Nonni und Manni* の翻訳) に始まって、同じくキリスト教徒の伊藤保訳『ノンニと氷のお国』 (1948, *Sonnentage* の翻訳) があり、北欧文学研究者の山室静訳『ノンニの冒険』 (1954), 山口四郎訳『ノンニの冒険』 (1960) など、他作家の作品との合本、絵本や再版を含めて少なくとも17冊を数える。これはカトリック圏以外では、本国アイスランドに次いで2番目に多い。ヨウンは1937年来日しており、東京四谷の上智大学修道院に1年間、滞在した。その体験は『ノンニの世界旅行』 (*Nonnis Reise um die Welt* 1948～49) の後半に見られる (アイスランド語訳『ノンニの世界旅行第2巻 日本のノンニ』 (*Ferð Nonna umhverfis jörðina II. Nonni í Japan* 1955～56))。

7.6. グンナル・グンナルソン — 海外で最高の名声を得たデンマーク語作家

グンナル・グンナルソン (Gunnar Gunnarsson 1889～1975) はそれ以前の誰よりも海外で大きな名声を得たアイスランドの大作家である。東部の北ムーラシスラ (Norður-Múlasýsla), フリョウツダールル (Fljótisdalur) のヴァルシヨウフスターズル (Valþjófsstaður) で農家と牧師の家系に生まれ、近郊のヴォホプナフィエルズル (Vopnafjörður) に育った。1907 年, 18 歳で作家になる決意をもってデンマークに渡り, ユラン (ユトラント) 地方の名門アスコウ (Askov) の国民学校に入学した。下積みの時期を経て, 1912 年にコペンハーゲンで世に認められると, 次々とデンマーク語で作品を発表した。第二次大戦が勃発した 39 年にフリョウツダールルに戻り, 農業のかたわら文筆に励んだ。48 年以降は大戦後の生活苦からレイキャヴィークに移住した。グンナルは次章で述べるハルドウル・ラハスネス以前にヨウン・スヴェインソンと並んで最も多く読まれたアイスランド人作家で, 1930 年にはノーベル文学賞候補にもなり, 74 年にはアイスランド大学から博士号を贈られた。

作品は 40 巻余りを数え, 小説以外にも様々なジャンルに及んでいる。代表作の大半はデンマークで暮らした 30 余年の間に成立したもので, すべて祖国の伝統と歴史を主題としている。出世作『ボルグ一族の物語から』(*Af Borgslægtens Historie* 1912～14) は, アイスランド農民一族内の対立と融和を明るく瑞々しい感性でロマン派的な手法を用いて描いた 4 部作である (原題はデンマーク語, 以下同様)。スカンジナビア全土でベストセラーとなり, 後に映画化された。しかし, グンナルは第一次大戦で現実の問題に目覚め, 人生の意義と神への信仰を問い詰める思想的・宗教的性格の厳しい自然主義的な作風を深めていった。神の存在を疑い, 狂気に陥る牧師を描いた『人生の岸辺』(*Livets Strand* 1915), 現実の生活にたいして懐疑的でアルコールに逃避する青年が嵐の日に船で遭難する顛末^{てんまつ}をつづった『聖堂の狼』(*Varg i Veum* 1916), 1918 年のスペイン風の大流行と火山の噴火で危機に見舞われたレイキャヴィークの 1 週間の出来事の中で, 冷笑的な敵対者の手によって狂気に陥る人道的な医師を主題にした『心の貧しい者は幸いである』(*Salige*

er de enfaldige 1920) などがそれである。こうした悲観的な色彩の強い作品群に続いて、大戦の終結後、穏やかさと楽観主義を取り戻したその筆から、全5巻の代表作『山の教会 I-V』(*Kirken paa Bjerget I-V* 1923~28) が生まれた。これはフリュウツダールで少年時代の思い出(『麦藁との戯れ』*Leg med Straa* 1923)、ヴォホブナフィエルズルへの転居と母の死(『空の船』*Skibe paa Himlen* 1925)、青年時代の悩みとデンマークへ旅立つ決意(『夜と夢』*Natten og Drømmen* 1926)、新天地での苦難の生活(『未熟な旅人』*Den uerfarne Rejsende* 1927)、コペンハーゲンでの作家としての自立(『果敢な船乗りフグレイク』*Hugleik den haardtsejlende* 1928) を内容とする自伝的性格の強い小説である。主人公は背景に退き、周囲の人物や自然を次々とモザイク風に描き出す小説技法を駆使している。

アイスランドの歴史に題材を求めた10作を越える歴史小説もある。植民の時代を扱った『盟友たち』(*Edbrodre* 1918)、建国の時代をテーマとした『大地』(*Jord* 1933)、アルシングのキリスト教改宗決議に題材を得た『白いキリスト』(*Hvide-Krist* 1934)、デンマーク人の手で処刑された最後のカトリック司教と息子たちを描いた『ヨウン・アーラソン』(*Jon Arason* 1930) がその例である。最後の小説でヨウン・アーラソンとその親族が死刑執行人の手で次々に首を斬られる場面の描写は、じつに陰惨である。グンナルはこの一連の作品で、人間の生存の闘いと他者への責務という問題を追求した。30年代にはドイツで評価されたが、その歴史小説はナチス・ドイツに悪用されたことも事実である。ナチスを支持したノルウェー人作家クニユート・ハムスン(Knut Hamsun 1859~1952)とともに、36年にハイデルベルク大学で名誉博士号を授与され、40年春のデンマーク侵攻の数日前には、唯一のアイスランド人としてヒトラーと面会している。

デンマーク語以外でも親しめる手頃な作品は、『待降節』(*Advent* 1937)だろう。吹雪で山中に迷った羊を救おうとする素朴な老羊飼いを描いたこの中編小説は、日本では中世ドイツ文学者として著名なヘルムート・デ・ボーア(Helmut de Boor 1891~1976)の手でデンマーク語原典の出版以前に独訳され(ドイツ語訳 *Advent im Hochgebirge* 1936)、レクラム文庫に収められ

ている。

祖国に戻ったグンナルはアイスランド語でいくつか作品を発表したが、晩年は自作のアイスランド語訳に力を注いだ。その試みはかならずしも成功したとは言えないようである。『山の教会』全5巻をアイスランド語に訳したハルドウル・ラハスネスをはじめ、その後の翻訳家の努力で、グンナル・グンナルソンの文学は祖国の人々の心にも深く刻まれることになった。

7.7. クリスマン・グヴズムンソン — 恋愛小説の名手のノルウェー語作家

クリスマン・グヴズムンソン (Kristmann Guðmundsson 1901~83) は西部のボルガルフィヤルザルシスラ (Borgarfjarðarsýsla), ルンダルレイキャダルル (Lundarreykjadalur) のスヴェルフェトル (Þverfell) の農家に生まれ、西端のスナイフェルスネース (Snæfellsnes) 半島に育った。1924年に作家になる決意でノルウェーに渡り、驚くべき短期間でノルウェー語ブークモール (bokmål) を習得した。2年後に短編集『アイスランドの愛』(Islandsk kjærlighet 1926) で成功を収め(作品の原題はノルウェー語ブークモール, 以下同様), 第二次大戦が勃発した39年に祖国へ戻るまで, 毎年のように短編集や長編小説を発表した。その間, オスロとコペンハーゲンに住み, ウィーンにも滞在している。ノルウェー語による著作は, クリスマン自身あるいは他者の手でアイスランド語に翻訳されている。帰国後は, レイキャヴィークと近郊のクヴェーラギエルジ (Hveragerði) に住み, アイスランド語で精力的に執筆を続けた。総作品は20編を越える長編小説と短編集4巻など, 膨大な数にのぼる。30以上の言語に翻訳され, 最も広く海外に紹介されたアイスランド作家に数えられる。文学的価値はノルウェー語ブークモールで書かれた作品が高く, 後年の母語による著作の評価はおしなべて低い。

クリスマンの最大の特徴は, 愛, 憎しみ, 憧れといった感情の葛藤をアイスランドの四季と自然が織りなす明暗のコントラストを背景に, 劇的に描き上げた点にある。若々しく官能的でリリズムあふれる情熱的な一連の作品によって, 恋愛小説の名手と称えられる。クリスマン自身, 7回結婚し

ており、最初の妻はノルウェー人、最後はアイスランド人だった。人生観はあくまで自由かつ肯定的で、社会的・哲学的性格は一般に薄い。『人生の朝』(*Livets morgen* 1929)、『青い岸辺』(*Den blå kyst* 1931)、『早春』(*Den første vår* 1933)、『白夜』(*Hvite netter* 1934) はそうした傾向を端的に示す代表的な長編小説である。最初の長編小説『花嫁衣裳』(*Brudekjolen* 1927) は夢の世界への逃避を描いた傑作とされる。

後年は歴史小説も手がけ、次第に神秘的な色彩を強めていった。北欧人とケルト人による故郷スナイフェルスネスへの植民を劇的に描写した『聖なる山』(*Det hellige fjell* 1932) などがある。ほかにも、D. H. ローレンスの『チャタレイ夫人の恋人』やノルウェーのノーベル賞女性作家シーグリッド・ウンセット (Sigrid Undset 1882~1949) の小説などの翻訳を行い、シーグルズル・ノルダルの『死者の国の女神』のノルウェー語訳も手がけた。

8. 新ロマン派の詩人たち —— 象徴詩と民衆詩 ——

8.1. 新ロマン派文学の台頭

19 世紀以降のアイスランドには、ヨーロッパ大陸の先進的な文芸・社会思潮が怒涛の勢いで相次いで流入した。極端に人口が少ないアイスランドでは、文芸思潮の展開は個人的な尽力に依存する度合いが高く、文学史上の展開が錯綜している場合が少なくない。以下では 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての主要な潮流と作家たちを拾って、多彩な個性をたどってみよう。

自然主義文学は 1880~1918 年に爆発的な興隆を見せたものの、他の北欧諸国と同様に、長く続くことはなかった。1910 年代末にはその革命的促進力は衰え、狭いテーマ設定は限界に達して、観念的な別の潮流に道を譲っていった。前述のエイナル H. クヴァーランやグヴズムンドゥル・フリジヨウンソンのように、自らその方向に転じた例もある。いわばロマン派と自然主義の止揚として、フランス象徴主義やドイツの哲学者ニーチェの超人思想などの影響を受けて、1890 年代に誕生し、20 世紀初頭の文学的潮流を彩るのが新ロマ

ン派 (nýrómantík) である。ジャンルとしては再び叙情詩が主流となった。

新ロマン派文学では、それまでのロマン派文学と異なり、国民中心の傾向から個人中心主義、伝統賛美から同時代の重視、神への畏敬から超人的な力への志向が顕在化した。愛情表現の根源性や高貴さが後退して現実味を帯び始め、直截だった詩のイメージは抽象性を強めて、読者に解釈を求めるようになり、理念のための芸術から芸術のための芸術に移行していった。

8.2. 新ロマン派文学の社会的背景

新ロマン派文学の特徴は、独立運動の進展に伴う社会的価値観の推移を色濃く反映している。1901年に誕生したデンマークの自由主義内閣の理解のもとで、1904年には自然主義作家ハンネス・ハフステインがアイスランドに在住する初のアイスランド人大臣に任命され、自治権が大きく拡大した。アイスランドは1874年の憲法発布で制限付きの立法権を得ていたが、当時のアイスランド大臣はコペンハーゲンに居住し、デンマーク王国の内閣の一員にすぎなかった。それまで、実質的な権限は1873年にレイキャヴィークに置かれた総督 (landshöfðingi) の手に委ねられており、デンマーク王に隷属していたのである。1904年は歴代3人を数えた「総督の時代」(Landshöfðingjatími) からの脱却を意味した。

ヨウン・シーグルソンの生誕100年にあたる1911年には、レイキャヴィークに「アイスランド大学」(Háskóli Íslands) が創立され、他国と肩を並べる高等研究教育機関が誕生した。すぐれた芸術家にはアルシングから補助金が支給され、作品に懸賞金が掛けられるようになった。1906年には電信回線を通じてアイスランドはヨーロッパ諸国と結ばれた。1907年には10～14歳の児童に義務教育が導入された。1913年には今日まで続いている最初の日刊新聞『モルグンブラージズ』(*Morgunblaðið*) が発行された。なお、1908年には国民投票でアルコール飲料の全面禁止が可決され、1915年から実施に移された。

第一次大戦で中立を守ったデンマークのもとで、アイスランドは戦火を免れた。1914年には「アイスランド蒸気船会社」(Eimskipafélag Íslands) が

設立され、大戦中も海外との通行が確保された。ドイツとの関係を懸念してデンマークを経由せずに貿易を求めて来たイギリスの政策もあって、戦時中、アイスランドはデンマークとの協定以上の経済的自立を享受した。1915年には国旗を獲得し、アルシング（＝国会）議員の選挙では40歳以上の女性に投票権が認められた（1920年以降、男性と対等の投票権を獲得。1922年、初の女性議員誕生）。1916年には最初の2大政党が結成された。大戦後は、国民国家形成を優先するヨーロッパの政治情勢の中で、シュレースヴィヒ（*D Schleswig*）/スレスヴィ（*デ Slesvig*）地方の帰属をめぐる問題でドイツとの国境を画定したデンマークは、アイスランドのさらなる要求を受け入れる必要に迫られた。そして、1918年にデンマークと同君連合で結ばれた主権国家であることを承認した。この時点で、アイスランドは実質的に独立を達成したと言える。なお、1928年にはヨーロッパ諸国に先駆けて死刑を廃止している。1830年を最後に、アイスランドでは死刑は一度も執行されていない。

一連の政治的状況の好転から、アイスランド国民は自信を取り戻した。大陸ヨーロッパが1世紀前に経験した状況がやっとこの地に訪れたと言える。国民は楽観主義に転じ、未来志向が進歩思想と結びついて、文芸思潮にも反映するに至った。1930年6月には、シングヴェトリルでアルシング創立千年祭が国民の3分の1を集めて挙行された。同年には「国立ラジオ放送」（*Ríkisútvarpið*）も開始され、強力な文化的メディアとなった。「国立病院」（*Landspítalinn*）もこの年に開設された。

19世紀末のアイスランドは中世さながらの農民社会を留め、都市人口は全体の5分の1だったが、第一次大戦期には半分以上に増大した。これには漁業の近代化の影響が大きい。発動機つきの漁船やトロール漁船が従来の手漕ぎ漁船に取って代わり、海岸部の町に人々が流入した。一方、農村部（＝農場自治体）では過疎化が進行していった。

ただし、総人口は1920年で95,000人弱であり、1873年から始まった北米大陸移民は1914年の時点で終息を迎えたものの、海外からの人口流入はなかった。当時のアイスランドはヨーロッパ最小で最貧国のひとつだった。大戦後の産業振興はほぼアイスランド人自身の手でなされた。主要産業は漁業

であり、魚の塩漬け加工生産が増大した。従来のデンマーク資本は漁業をかなり統括していたが、水力発電などの自然開発は、技術不足と保護政策のために外国資本の流入がなく停滞し、産業領域の拡大は進まなかった。この事情は後述するエイナル・ベーネディフツソンの挫折や、グヴズムンドゥル G. ハーガリーンの『肝っ玉母さんの話』にも反映されている。

8.3. エイナル・ベーネディフツソン — 新ロマン派の大御所の象徴派詩人

新ロマン派は初期の象徴詩とそれ以降の民衆詩との間で、大きく性格が異なる。初期の代表者は、新ロマン派の創始者で大御所的存在のエイナル・ベーネディフツソン (Einar Benediktsson 1864～1940) である。レイキャヴィーク近郊のエトリーザヴァハトン (Elliðavatn) 湖畔に生まれ、母親は詩人、父親はヨウン・シーグルソン以来、独立運動の最大の立役者で高等裁判所長を勤めた人物だった。その後、離婚した父親がシスラ知事（地方長官, sýslumaður）として赴任した北部の南シングエイヤルシスラで育った。1884～92 年にコペンハーゲン大学で悠々自適に法律を学び、文学に親しんだが、5.1. で述べたブランデスの自然主義には共鳴しなかった。その社会主義的・世界市民主義的志向は、祖国の政治的・経済的發展を夢見たエイナルの国民主義的理想と相容れなかったためである。

エイナルはすでに 1897 年に象徴主義を標榜していたが、その詩風はナイーヴな感受性や軽妙さからは程遠く、汎神論的神秘主義と言うべき荘重な思弁的・理知的内容を特色とする。深長なメタファー、伝統的なケンニング、驚くべき豊かな語彙と新造語を駆使し、独特な長詩行の形式で預言者的な箴言^{しんげん}を連想させる作風は、アイスランド叙情詩史上、類例を見ない。祖国に限らず、海外を広く見聞した経験を採り入れた試みも斬新で、思想詩として内面化する手法にも長じていた。ルームルにも強い興味を示し、ロマン派のルームル詩人シーグルズル・ブレイズフィエルズの作品を 1894 年に編纂し、後年にはグリーンランドを舞台にした『グリーンランド人オウラヴルのリーマ』(Ólafs ríma Grænlandings 1930) も試みている。詩集は 5 巻を数え、いずれも完成度が高く、評価はさわめて高かった。しかし、エイナルは次に述べ

る野望の挫折を経験し、自分自身の世界にこもり、選ばれた読者だけに詩作するようになって、広い読者層は獲得しなかった。『物語と詩』(*Sögur og kvæði* 1897), 『海の薄明かり』(*Hafblik* 1906), 『大波』(*Hrannir* 1913), 『入り江』(*Vogar* 1921), 『谷間の窪地』(*Hvammur* 1930) の中で、最初の2巻が比較的良く知られている。

実生活の面では、エイナルは多彩な社会活動を展開した。1892年にコペンハーゲン大学から法律の学位を取得すると、祖国で重要な司法・行政職に就いた。ジャーナリズムにも関与したが、1907年に海外に活路を求めて辺境の祖国を後にし、ロンドンとコペンハーゲンを中心に20年間、海外生活を送り、ヨーロッパ諸国を漫遊した。その規模の大きさは、ハルドウル・ラハスネスなど数例を除いて、類例を見ないほどである。エイナルはノルウェーの劇作家イブセンの代表作『ペール・ギュント』(*Peer Gynt* 1867) を『ピエートウル・ゲイトウル』(*Pétur Gautur* 1901) として翻訳しており、その後も改訂を施しているが、自らがその化身になったとも言える。祖国の水力発電の開発と電信の普及を目指して大資本を呼び込み、グリーンランドの植民地化をもくろんで奔走したが、同胞の理解を得られず、億万長者の地位から零落して孤独な晩年を送った。エイナルは祖国を独立達成の段階から、政治的・経済的大国の地位にまで押し上げ、文化的・宗教的にも同様の実現を夢見た。国民主義から世界市民主義への脱皮願望が独特の観念論と結びつき、文学的理想にまで昇華したと言える。文学的功績を認められたエイナルの魂は、シングヴェトリルに設けられた墓石の下で、ロマン派の国民詩人ヨウナス・ハトルグリムソンとともに眠っている。

ここでは初期の傑作『北極光』を紹介しよう。原文では脚韻と頭韻(原文第1節1行目 *duftsins ... dýrðlegri* と2行目 *drottnanna* の *d-* など)のほかに、ケンニングの使用にも注意(1行目 *duftsins*¹ *son*² 「塵の¹ 息子²」=「人間」、2行目 *drottnanna*¹ *hásal*² 「神々の¹ 高い広間²」=「天、空」、第2節1行目 *ránar*¹ *rönd*² 「ラウン ([ラーン] *Rán*, 北欧神話で海の神の妻) の¹ 縁²」=「海」)。

北極光 エイナル・バーネディフツソン
(*Norðurljós* Einar Benediktsson)

燃え上がる天に放たれた北極光の輝きに勝る
崇高な景観を知る者があろうか
金色に撓む弓の下に続く入り江の広がりを見よ
もはや賭け事 美酒の類に耽る者として無く
大地さえもリンネルに身を包む乙女の如く清楚に
秋景色に枯れた薔薇の花卉の内に微睡む
砂塵の粒は大気の様々な彩りに輝き
逆巻く河は銀色の飛沫となって交わり
極北の地の裾は脈打つオーロラの照射を浴びて
遍く炎の装飾を纏う身へと転ずる

Veit duftsins son nokkra dýrðlegri sýn
en drottanna hásal í rafurloga?
Sjá grundu og vog undir gullhveldum boga! —
Hver getur nú unað við spil og vín?
Sjálíf moldin er hrein eins og mæer við lín,
mókar í haustsins visnu rósum.
Hvert sandkorn í loftsins litum skín,
og lækirnir kyssast í silfurósum.
Við úttheimsins skaut er allt eldur og skraut
af iðandi norðurljósum.

虚空の高みより大海の深淵に至るまで
天蓋の拡がり^{ひろ}を前に光の児らは踊りに興じ
煌く大波は群れ寄せ^{きらめく} 襞^{ひだ}をなして
崩れ落ち^{うな} 唸りつつ 岸辺の陰に打ち寄せ

あたかも見えざる手の恣意のままに
光彩の円環は歌留多^{かるた}遊戯の相を帯びる
閉ざされた街道 暗闇の丘の背後より
死せるもの皆 今や生命^{いのち}の国を注視し
霧氷^{むせ}に咽ぶ断崖は海原の静けさの中で
水晶色^{まなこ}の眼を擡^{もた}げ 太^{たい}空^{いくう}を仰ぐ

Frá sjöunda himni að ránar rönd
stíga röðlarnir dans fyrir opnum tjöldum,
en ljóshafsins öldur með fjúkandi földum,
falla og ólga við skuggaströnd.
Það er eins og leikið sé huldri hönd
hringspil með glitrandi sprotum og baugum. —
Nú mænir allt dauðlegt á lífsins lönd
frá lokuðum brautum, frá myrkum haugum,
og hrímklettar stara við hljóðan mar
til himins með kristallsaugum.

命を賭し 闘^{むさ}いを仕掛けた諸々の業^{わざ}は
今や押並^{おしな}べて些細な戯^{ざれごと}れ言にも等しく
石打たれ 憎しみを買い 脅しを被ろうと
小^{しょうじん} 人^{いたずら}の悪戯に似て 心乱されることも無い
蒼^{そうきゆう} 穹^{まばゆ}はかくも眩^{くら}く 果^{ところ}てる処を知らず
今や星々は微笑^{あだ}み 望^{のぞ}みは徒となろうと
思惟^{しゆい}はさなる高みへと飛翔する
今や塵埃^{じんあい}の形相には神の諸力が息づき
我らは己の精力を汲み取る 今宵は
光の国の内に我らの権利の確かなるを知る

Nú finnst mér það allt svo lítið og lágt
sem lifað er fyrir og barist er móti.
Þó kasti þeir grjóti og hati og hótí,
við hverja smásál ég er í sátt.
Því bláloftið hvelfist svo bjart og hátt.
Nú brosir hver stjarna, þótt vonirnar svíki,
og hugurinn lyftist í æðri átt,
nú andar guðs kraftur í duftsins líki.
Vér skynjum vorn þrótt, vér þekkjum í nótt
vorn þegnrétt í ljóssins ríki. —

天海はいかに強大で深遠であろうと
高く帆を靡^{なび}かせた船は怯^{ひる}むことなく
行く先を見据え 面舵^{おもかじ}を切りつつ
港を求め 航路をひた走り急ぐ
だがしかし 我らにこの光景を感知する術を与え給うた
御方を仰ぎ見た者は無く 北極光の根源は謎のままに
人々は跪^{ひざまず}き 巡礼の杖を携え
聖堂^{がらん}の下で秘蹟^{もと}の訪れを待つも
起こるべき何事とて無く あらゆる門は固く閉ざされ
深奥に潜む魂は崇高の沈黙をただ守り継ぐのみ

Hve voldugt og djúpt er ei himinsins haf
og hásigldar snekkjur, sem leiðina þreyta.
Að höfninni leita þær, hvort sem þær beita
í horfið — eða þær beygja af.
En aldrei sá neinn þann sem augað gaf,
— og uppsprettur ljóssins ei fundnar né skýrðar.
Með beygðum knjám og með bænastaf

menn bíða við musteri allrar dýrðar.

En autt er allt sviðið og harðlæst hvert hlið

og hljóður sá andi, sem býr þar.

8.4. その他の新ロマン派詩人たち ― 民衆詩の隆盛

20 世紀初頭には素朴な民俗性にあふれ、音楽的で感覚的な作品を書いた一連の叙情詩人が現れた。スケールの点では小粒の感はあるが、古風な修辭法を凝らした荘重な文体から解放されて、自然な口調の親しみやすい作風で広く人々の心を捉えた。伝統的なケンニングの使用も、マハティアス・ヨホクムソンとエイナル・ベーネディフツソンの両巨匠とともにほとんど姿を消した。ここに至って新ロマン派は広く読者に受け入れられた。

グヴズムンドゥル・グヴズムンソン (Guðmundur Guðmundsson 1874～1919) は音楽性と韻律の巧みに秀で、レイキャヴィーク・ラテン語学校の学生時代から「学校詩人」(skólaskáld)の異名を取った。『詩集』(*Ljóðmæli* 1900)以来、7 巻の詩集を残した多作家で、自然主義を嫌ってボードレル、ヴェルレーヌなどのフランス象徴詩を原文で読みこなし、医学から転じてジャーナリストとなり、独立運動と禁酒政策にも関与した。

シーグルズル・シーグルソン (Sigurður Sigurðsson 1879～1939) はアイスランド人の父親とデンマーク人の母親との間にコペンハーゲンで生まれ、後述するヨウナス・グヴズレイフソンとともに処女作『双子座』(*Tvístirnið* 1906)を刊行した。「おお、夢よ、おまえはなんと愛しいことか」(„*Ó, draumur, hve eg unni þér*“)という詩句が示すように、夢の世界に美の実現を感じ取り、感情の起伏を思うがままに作品に反映させ、デカダンスも感じさせる。ニーチェの崇拜者で唯美主義者として知られ、シングエイインガルのひとり、ヨウン・トレイスティを痛烈に批判したこともある。薬剤業を営んで成功し、後に2冊の詩集を刊行したが、晩年は貧困のうちに詩才も衰えていった。

ヨウナス・グヴズレイフソン (Jónas Guðlaugsson 1887～1916) は17歳で世に出た早熟の詩人で、『暁の岸辺』(*Árroðans strönd*)と題する作品に夢の世界をたとえ、それへの憧憬をうたった。祖国の狭さに飽き足らず、1909年

にノルウェー、2年後にはデンマークへ渡って、ヨウハン・シーグルヨウンソンのサークルに出入りした。ジャーナリストおよび編集者として生計を紡いだが、ヨウハンと同様、結核を患って惜しくも早世した。デンマーク語による詩や小説も少なからず残している。グンナル・グンナルソンのデンマーク語による大作『山の教会 I-V』に影響を与えた詩も書いている。

8.5. フルダ——天性の叙情性と高い教養を備えた女性作家

同世代の詩人たちの中で比較的長寿に恵まれたフルダ (Hulda 1881～1946) は、当時としては珍しい多作の女性作家として、今日でも尊敬を集めている。後述するように、フルダはペンネームであり、本名はウンヌル・バーネディフツドゥフティル・ビャルクリンド (Unnur Benediktsdóttir Bjarklind) という。シングエイインガルたちに影響を与えた知識人バーネディフト・ヨウンソン・アウ・エイズヌムの娘として、南シングエイヤルシスラ、ラハサウルダールル (Laxárdalur) のエイズニル (Auðnir) に生まれ、高い教養を身につけた。1905年から主婦として同シスラの中心地フーサーヴィーク (Húsavík) に住み、35年以降はレイキャヴィークで暮らした。

天性の純粹で柔らかな叙情性と民謡調の詩句の巧みさで、フルダは早くから称賛を集めた。処女作の『詩集』(*Kvæði* 1909) 以来、全部で7巻の詩集を残し、短編集も『若き日の愛 I-II』(*Æskuástir I-II* 1915～19) から『我が祖国にて』(*Í ættlandi mínu* 1945) まで9作を数える。2作の長編小説のひとつ、『谷間の民 I-II』(*Dalafólk I-II* 1936～39) は、故郷の北部の農場での充実した生活を理想化を交えてつづったもので、晩年の落ち着いた境地を示している。妻と死別した裕福な農夫の娘イーソウル (Ísól) は、自由を求めて広い世界に飛び出す。しかし、やがて恋人の待つ故郷の農場に戻り、狭い世間を受け入れて慈善活動と文化遺産の継承に身を捧げるという筋書きである。自費出版による729ページのこの大作は、ハルドウル・ラハスネスの『独立の民』を意識して書かれたと言われている。

フルダは祖国の民謡に深い関心を寄せた。ヨウン・アウルトナソンとオウラヴル・ダーヴィズソンが編纂した『アイスランドのなぞなぞ遊び、笑話、

ヴィーキヴァーキ、シュールル I-IV』に感化されて、「シュールル」(pulur, 「シューラ」(pula) の複数形) と呼ばれる自由な詩形による童謡(わらべ歌) を新しいジャンルに高め、口承文芸の伝統を復興させた。シュールルは子供を意識した女性の文芸ジャンルとなり、テオウドウラ・トウロドセン(Theodora Thoroddsen 1863~1954) の『わらべ歌』(*Pulur* 1916) など、女性作家たちの創作意欲をかき立てた。

前述のように、フルダは若いころ、ヨウナス・ハトルグリムソンの『苔摘みの旅』に接し、女性の詩作を不適切と認める姉の^{せりふ}台詞を文字通り解釈して衝撃を覚え、詩作を始めた自分に後ろめたさを感じたと告白している。「フルダ」という筆名は動詞 hylja「隠す」(ド hüllen) の過去分詞で、「隠された女性」を意味する。フルダは海外留学の経験もなく、華々しい経歴を重ねたわけでもない。その創作は男性中心の文学的伝統の中で、女性作家の存在を主張することへの躊躇を克服する形でなされた。次に紹介する『「翼をください」』は、「雁(=ハイロガン)の母よ、翼をください(=貸してください)」という古いシューラの引用で始まり、シュールルの特徴である詩句の反復を多用している。遠い南の国に自由に飛んで行きたいという願いには、主婦として日々の多忙な務めをこなし、虚弱な体質を押して創作を続けたフルダの女性の地位向上への思いが込められている。それは当時のアイスランド女性作家に共通の見果てぬ夢でもあった。元女性大統領ヴィグディス・フィンボーガドゥフティル女史が編んだ『アイスランド詩集』(*Íslensk kvæði* 1989) にも収録されている。

「翼をください」 フルダ
(*Ljáðu mér vængi* Hulda)

「雁の母よ	„Grágæsamóðir!
翼をください」	ljáðu mér vængi“,
海原を越えて	svo ég geti svifið
南の国に飛べるように	suður yfir höf.

花々はしな垂れて葬られ	Bliknuð hallast blóm í gröf,
陰の網が光を隠します	byrgja ljósið skugga tröf;
ひとり私は遅れをとり	ein ég hlýt að eiga töf
冷たい浜辺に残されます	eftir á köldum ströndum,
空ろな夏の浜にいます	ein ég stend á auðum sumarströndum.
遙か遠くへ行きたい だから	Langt í burt ég líða vil,
旅の道具をお恵みください	ljá mér samfylgd þína!
私に翼はありません	Enga vængi á ég til
あるのはただ憧れの思い	utan löngun mína,
込み上げる若さの憧れのみです	utan þrá og æskulöngun mína.
あなたの軽やかな持ち物で	Lof mér við þitt léttu fley
小さな乗り物を編ませてください	lítið far að binda;
荒波のしぶきは厭 いと いません	brimhvít höf ég óttast ei
吹きつける風も恐れませんか	eða stóra vinda.
海を越えた山の向こうに	Okkar bíður blómleg ey,
海原と白銀の峰 かなた の彼方に	bak við sund og tinda,
花咲く島が私たちを呼ぶのです	bak við sæ og silfurhvíta tinda.
呼ばれることのなかった私は	Eftir mér hún ekki beið, —
切り立つ崖の端に立ち	yst við drangann háa
行き着く先を眺めていました	sá ég, hvar hún leið og leið
彼方に続く空の青さを	langt í geiminn bláa
道なき青い空の果てを	langt í geiminn vegalausa, bláa.

1944年6月17日、アイスランドはデンマークとの同君連合を解消して、完全独立を宣言した。フルダは同日の建国祭に献上した『1944年6月17日の建国祭に捧げる詩』(Söngvar, helgaðir þjóðhátíðardegri Íslands 17. júní, 1944)と題する4部から成る有名な詩で、ヨウハネス・ウール・ケヘトルム (Jóhanes úr Kötlum) とともに最優秀賞を得て、作家として有終の美を飾った。次に紹介する『だれにもっと美しい祖国があろう』は、その第3部に当たる

(テキストは著者自身の手稿から筆者が転写したもの。sjer は現行の正書法に従って sér に変更した)。

だれにもっと美しい祖国があろう フルダ
(*Hver á sér fegra föðurland* Hulda)

だれにもっと美しい祖国があろう
山々と谷間 青い砂浜
オーロラの輝きの帯
山裾の白樺に菩提樹
平和な住処^{すみか} 光と歌
世の争いの喧騒^{けんそう}から遠く離れ
神よ 我らの尊い^{とうと}国を
戦^{いくさ}の渦中から護り給え

Hver á sér fegra föðurland,
með fjöll og dal og bláan sand,
með norðurljósa bjarmaband
og björk og lind í hlið?
Með friðsæl býli, ljós og ljóð,
svo langt frá heimsins vígaslóð.
Geym, drottinn, okkar dýra land
er duna jarðarstríð.

この世にほかのどんな民があろう
剣の音も血の飛沫^{しぶき}も知らず
平和の恵む愛と詩と
富のもとに至福に満ちて
湧き上がる熱泉 澄み渡る風
氷河の峰と碧海^{へきかい}を戴き
清く 健やかに 賢明に
海原のもとで自由に暮らす

Hver á sér meðal þjóða þjóð
er þekkir hvorki sverð né blóð,
en lifir sæl við ást og óð
og auð, sem friðsæld gaf?
Við heita brunna, hreinan blæ
og hátign jökla, bláan sæ
hún unir grandvör, farsæl, fróð
og frjáls — við ysta haf.

ああ アイスランド 麗しの祖先の地
永久^{とわ}にあなたの幸せが栄え
あなたの岸边から諸悪^{ひる}が怯み

Ó, Ísland, fagra ættarbyggð,
um eilífð sé þín gæfa tryggð
öll grimmd frá þinni ströndu
styggð
og stöðugt allt þitt ráð.

万物にあなたの力が及ばんことを

日々 新たな偉業がもたらされ	Hver dagur líti dádð á ný.
夢見る夢がかなえられ	Hver draumur rætist verkum í,
アイスランドの愛しい地が	svo verði Íslands ástkær byggð
異国の民に蔑まれることなかれ	ei öðrum þjóðum háð.
けっしてアイスランドの未来が	Svo aldrei framar Íslands byggð
異国の民に蔑まれることなかれ	sé öðrum þjóðum háð.

8.6. スターファウン・フラウ・クヴィータダール——個人感情を吐露した詩人

個人の感情を包み隠さず、自由な形式で素朴に訴えかける詩風で国民全体から支持を得たのは、第一次大戦後に刊行されたスターファウン・フラウ・クヴィータダール (Stefán frá Hvítadal 1887～1933) とダーヴィズ・スターファウンソンの処女作である。後述するシーグルズル・ノルダルの散文詩もこの時期に出ている。1920 年はアイスランド叙情詩の分岐点であり、同年のマハティアス・ヨホクムソンの逝去は象徴的な出来事だった。

スターファウンは北西部の貧しい農家に生まれ、独学で身を修めた。仕事を求めて 1912 年にノルウェーに渡ったが、結核を病んで 3 年間の大半をサナトリウムで過ごした。その間、アーネ・ヴィニエ (Arne Vinje 1818～70)、ペール・シヴレ (Per Sivle 1857～1904)、ヘンリク A. ヴェルゲラン (Henrik A. Wergeland 1808～45)、ヘルマン・ヴィレンヴァイ (Hermann Wildenvey 1885～1959) など、ノルウェー人作家の作品を耽読し、弱－強－弱－強のスタッカート・リズムによる新リフレイン (ノ nystev) に代表されるノルウェー詩の手法を学んだ。1915 年に帰国し、3 年後に処女作『放浪者の歌』(Söngvar förumannsins 1918) を刊行すると、簡素な短詩の形式を取って、晴朗さと哀愁の間を揺れ動く感情を率直に歌い上げた作風が大きな話題となった。生の人間の感情を官能的な恋愛を含めて、これほど包み隠さずモダンに表現した例はなかった。この功績によって、アルシングからは作家活動への奨励金を支給された。

スターファウンは翌年、生涯の良き伴侶を得て、農夫として居を構えたが、

病の悪化に苦しみ、1923年にカトリックに改宗した。その後は伝統的な古語の詩形に回帰し、後述する初期のハルドウル・ラハスネスなどを除いて、北欧作家の稀有な例としてカトリック宗教文学作品を書いた。カトリック教会を称えた60節から成る『聖なる教会』(*Heilög kirkja* 1924)はその例である。この作品は、14世紀の修道士エイステイトン・アウスグリムソン (Eysteinn Ásgrímsson?~1361) による聖母マリア賛美を中心とした『リリア』(*Lilja*) にならったものである。『リリア』は100節から成る宗教詩であり、それまでのスカルド詩とは異なって、1行6音節にたいして1行8音節の均斉のとれたリズムを用い、ケンニングを廃した平明さを特徴とする。この形式は「リリア詩節」(*liljulag*) と呼ばれている。ステーファウンは10人の子供を養いつつ、片足を切断するなど、病の進行とともに残りの短く貧しい生活を送った。それでも『春の訪れ』(*Það vorar*)、『女性たちよ』(*Þér konur*) などの詩で、往時の若々しい叙情的感性を晩年まで保持し、全部で5冊の詩集を残した。

8.7. ダーヴィズ・ステーファウンソン — 国民詩人に叙せられた民衆詩人

ダーヴィズ・ステーファウンソン (Davið Stefánsson 1895~1964) は北部のエイヤフィヤルザルシスラ (Eyjafjarðarsýsla), ファグリスコウグル (Fagriskógur) で富裕な農家に生まれた。前述のフルダに影響を与えた民俗学者オウラヴル・ダーヴィズソンの母方^{おい}の甥にあたり、父親はアルシングの議員だった。アイスランド大学を卒業後、1920~21年のイタリア滞在など、海外にも旅行したが、25年以降は北部の中心地アークルエイリ (Akureyri) で51年まで27年間、図書館員を勤め、後年、同市の名誉市民にもなった。

ダーヴィズはやはり処女作『黒い羽』(*Svartar fjaðrir* 1919) で広い支持を集めた。民謡を思わせる素朴な語法と簡素な韻律を援用して、あらゆる感情の起伏を率直に表現し、報われない愛の苦悩を死と隣り合わせにして幻想的にうたった。その後は、第二次大戦後の『新詩集』(*Ný kvæðabók* 1947) を経て、『最後の詩集』(*Síðustu ljóð* 1966) に至るまで、全部で10冊の詩集を残した。後年には社会性を帯び、ときには時事問題も扱った。喜劇『黄金

の門』(*Gullna hliðið* 1941) や小説『アイスランド人ソウロン』(*Sólon Islándus* 1940) でも賞賛を得た。前者の戯曲は、袋の中に亡夫の魂を隠し持ち、それを天国の門の中に巧妙に投げ入れる妻を描いた有名な民話を素材にしている。後者の小説は、19 世紀のアイスランド人放浪者が祖国の後進性のために、芸術的野心を砕かれる悲劇を描いたものである。

ダーヴィズは社交を好まず、孤独を愛する性格とは裏腹に、民衆からかつてないほど人気を得た多作の作家だった。前述のマハティアス・ヨホクムソンに続いて国民詩人に列せられ、アルシングから詩人として年金を支給されて、生活費の半分をまかなった。1920 年代の叙情詩の革新者と言われるが、伝統的な詩法の擁護者でもあった。ダーヴィズはエイナル・バーネディフツソンの詩の難解さから、次世代のモダニズムが目指した伝統的詩形式からの脱却に至る、両者の橋渡しの役割を果たしたと評される。

民謡的な口調と素朴な哀愁を表す小品として、詩集『黒い羽』から『お母さんは眠ろうとしているの』を紹介しよう。前述のシグヴァルディ S. カルダロウンスの作曲で、歌曲としてもよく知られている。

お母さんは眠ろうとしているの ダーヴィズ・ステーファウンソン
(*Mamma ætlar að sofna* Davið Stefánsson)

ここに来ておすわりなさい
かわいい妹よ
今夜はそっと
静かにしていきましょう

Sestu hérna hjá mér,
systir mín góð.
Í kvöld skulum við vera
kyrrlát og hljóð.

今夜はそっと
おとなしくしていきましょう
お母さんは夕焼けの中で

Í kvöld skulum við vera
kyrrlát af því,
að mamma ætlar að reyna að
sofna

眠ろうとしているのだから

rökkkrinu í.

お母さんは眠ろうとしているの	Mamma ætlar að sofna.
お母さんはとても疲れているの	Mamma er svo þreytt.
眠りが消すことのできる	— Og sumir eiga sorgir,
悲しみを背負う人もいれば	sem svefninn getur eytt.
眠りの世界にだけ	Sumir eiga sorgir,
かなえることのできる	og sumir eiga þrá,
願いを抱く	sem aðeins í draumheimum
人たちもいる	uppfyllast má.
今夜はそっと	Í kvöld skulum við vera
静かにしていきましょう	kyrrlát og hljóð.
お母さんは眠ろうとしているのだから	Mamma ætlar að sofna,
かわいい妹よ	systir mín góð.

8.8. トウマス・グヴズムンソン — 新ロマン派叙情詩の最後の興隆

新ロマン派の叙情詩はトウマス・グヴズムンソン (Tómas Guðmundsson 1901~83) に最後の興隆を見た。トウマスは南西部のアウルトネスシスラ (Árnessýsla), グリムスネス (Grímsnes) のエヴリブルー (Efribrú) に生まれた。アイスランド大学で法律学を専攻した後に、政府の統計局に勤めた。そして、外国詩の紹介者として名高いマグヌス・アウスギェイルソン (Magnús Ásgeirsson) とともに、文芸誌『ヘルガフェトル』 (*Helgafell* 1942~46), 『新ヘルガフェトル』 (*Nýtt Helgafell* 1956~59) の編集に従事した。両誌は有力な文芸誌として強い影響力を持った。

2作目の詩集『美しい世界』 (*Fagra veröld* 1933) がとくに名高い。この世の美と過去への憧憬をアイロニーを交えて、詩語と口語を巧みに併用し、明るく軽やかな民謡調のリズムに乗せてうたっている。同詩集は兩大戦間期の代表的な詩集となった。新興都市レイキャヴィークの魅力を題材に取った点も斬新で、最初の「都市の詩人」(borgarskáld) と呼ばれた。現代詩の開

拓者ステイトン・ステイナルの初期の作品にも影響を与えた。

トウマスはアイスランド詩人としては珍しく、日本にちなんだ次の詩を残している。日本文化の本質に迫るものではないが、水底に潜る海人の姿が異国情緒と幻想的な世界を演出している。脚韻に加えて、2行連句の頭韻（1～2行目 *morgnar mjúkri, marardjúpin* の m- から 13～14 行目 *táknin fitra, tunglskinsbjarma* の t- まで）に注意。アイスランド語が 20 世紀にも、古ゲルマン語詩の頭韻を残す唯一のゲルマン語である事実がうかがえよう。

日本の詩^{うた} トウマス・グヴズムンソン
(*Japanskt ljóð* Tómas Guðmundsson)

夜明けの日本 白浜の果てに続く
海の底に染み入る鈍い光
漕ぎ出された船 高価な真珠を求めて
水底に潜る若者らの姿

Japanskir morgnar mjúkri birtu stafa
á marardjúpin fyrir hvítum sandi.
Og ungir sveinar ýta bát frá landi
og eftir hafsins dýru perlum kafa.

時は過ぎ 岸辺に落ちる夕闇の影
海の青さに揺れて透き通る波
月の光に映える穏やかな夏の夜
珊瑚礁の周りに微かに響く小夜曲^{かす}

En seinna, þegar hóm á strendur hnígur
og höfin bláu vagga tærum öldum,
á mánabjörtum, mildum sumarkvöldum

mansöngur lágt um kóralskóga stígur.

若人らは白い茂みの陰に甘んじ
愛し合う者は百合の冠を結うも
小魚たちはきらめく鱗^{うろこ}をなびかせ
深い海底の逢瀬へと急ぐ

Því meðan æskan unir hvítum runnum
og elskendurnir liljusveiga binda,
leifrandi uggum litlir fiskar synda
á lítil stefnumót í djúpum unnum.

至福に満ちてはためく小さな鰓^{えら}と鰓
月明かりに輝く藻の髪と貝の殻

Af ást og sælu litlu tálknin titra.
Í tunglskinsbjarma þang og skeljar glitra.

8.9. シーグルズル・ノルダル—— 散文詩の開拓者、中世文学の巨匠

新ロマン派の精神と国民主義的理想像を原動力として、すぐれた文学および文化史研究を行ったドイツのグリム兄弟のような存在がシーグルズル・ノルダル (Sigurður Nordal 1886～1974) である。北部の東フーナヴァスシスラ (Austur-Húnavatnssýsla), ヴァスダールル (Vatnsdalur) のエイヨウルフスタージル (Eyjólfsstaðir) に生まれ、レイキャヴィーク普通ギムナジウムを経て、コペンハーゲン大学でアイスランド文学を学んだ。1914年に博士の学位を得て、同地でアーナマグネア研究所に勤め、16～19年にはベルリンとオクスフォードで研鑽を重ねた。

シーグルズルはまず、前述のダーヴィズ・ステーファウンソンの流れを汲んだ『^{いにしえ}古の愛』(Fornar ástir 1919)で作家として名声を得た。これはドン・

ファンとペール・ギュントを合わせたような奔放な放浪と故郷への帰還をうたい、高い格式と豊穡さに満ちた文体の中に新ロマン派的性向と国民主義的理念が鮮明に投影された作品である。中心部分を占める『死者の国の女神』(*Hel*) は、アイスランド文学史上初の散文詩の形式による。

その後、シーグルズルは作家活動を自粛し、学究の道を選んだ。卓抜な学識を認められ、1911年の創設後間もないアイスランド大学で18～51年の間、アイスランド文学教授を歴任し、定年後も同大学で研究活動に従事した。その間、同大学学長(22～23年)、「アイスランド学士院」(*Menntamálaráð Íslands*)の初代院長(28～31年)に選出され、北欧諸国とアメリカ(ハーヴァード31～32年)の大学に招聘されて、北欧諸国とイギリスの大学から名誉教授の称号を授与された。ほぼ同時期の1915年からアイスランド語学教授の地位にあったのは、『アイスランド語語源辞典』(ド *Ísländisches etymologisches Wörterbuch* 1951～56)で名高いアーレヘサデル・ヨウハネソン(*Alexander Jóhannesson* 1888～1965)である。32～35, 39～42, 48～54年の3度、学長職を歴任し、同大学の骨格を築いたこの人物とともに、シーグルズルはアイスランド語学文学をリードした。定年後の51～57年には、コペンハーゲンでアイスランド大使を務めた。

シーグルズル・ノルダルは20世紀両大戦間の中世アイスランド文献学および文化史研究の巨匠である。冷徹な学問的姿勢に文学的想像力を交えることを忘れず、現代社会への問題意識に裏打ちされたその研究は、生命感を失うことがなかった。初期の『スノッリ・ストゥルトルソン』([スノッリ・ストゥルトルソン], *Snorri Sturluson* 1920)は偉大な中世期の作家と首長としての悲劇的人物像を浮き彫りにし、サガ文学の発達を詳細にたどった労作である。『巫女の予言』(*Völuspá* 1923)では難解なエッダを文献学的に解きほぐし、その魅力を同時代の読者の感性に訴えかけた。菅原邦城氏による翻訳がある。『アイスランド語読本 1400～1900年』(*Íslensk lestrarbók 1400-1900* 1924)は主要なテキストを選んで文学史的概説を添えたもので、とくにリームルの意義を強調している。同書は『アイスランド語読本 1750～1930年』(*Íslensk lestrarbók 1750-1930* 1942)として改訂され、学校教育で模範的教科書とし

て長く用いられた。『アイスランド文化 I』(*Íslenzk menning I* 1942)はハーヴァード大学での講義をもとに、本来、3巻の予定で構想された中世から19世紀に至るアイスランド文化史の第1巻である。エッダやサガの持つ固有の価値に加えて、何よりもこれがアイスランドの人々の血肉となり、苦難の時代を経て19世紀の復興への原動力となった過程を描き、大きな賞賛を博した。ほかにも、古今の代表的なアイスランド人作家についての論説を集めた『様々な意匠』(*Áfangar* 1943~44)など、膨大な業績がある。

シーグルズルはまた、1933年以来、厳密なテキスト校訂を行った『アイスランド古典文学体系』(*Íslenzk fornrit*)の編纂を主導し、後世に大きな足跡を残した。自らも『エギルのサガ』(*Egils saga Skallagrímssonar* 1933)などを担当しており、同文学大系は最も標準的な中世文学のテキスト・シリーズとして、今日まで刊行が続いている。さらに、1937年にはアイスランドの文化を総合的に扱った学術誌『アイスランド研究』(*Studia Islandica. Íslensk fræði* 1937~)を創刊し、51年の第12巻まで編集に従事した。生誕百年に当たる1986年には、アイスランド大学に「シーグルズル・ノルダル研究所」(*Stofnun Sigurðar Nordals*)が設立され、海外との学術交流とアイスランド文化の国際的普及機関になっている(初代所長ウルヴァル・ブラーガソン *Úlfar Bragason*)。

シーグルズルは当時の大御所だった前述のエイナル H. クヴァーランの世界市民主義と心霊主義、人道主義にたいして、脆弱なブルジョア主義として批判の矛先を向けたが、これは以上の説明から容易に理解できよう。一方、ヨーロッパの新しい文学の影響を受けて書かれた後述するハルドウル・ラハスネスの初期の傑作『カシミールの偉大な職工』(1927)にも、否定的な態度を取った。これはその国民主義的発想の保守性を看取させる。文学の潮流はすでに1930年代以降の新時代への胎動を伴っていた。祖国とその歴史を創作のテーマにする必然性は、もはや希薄になっていたのである。

出典

- ギェストウル・パウルソン『乞食の老婆』(Gestur Pálsson: *Betlikerlingin*) (Silja Aðalsteinsdóttir 1993: 267)
- ソルステイトン・エルトリングソン『ラスク——1887年の生誕百年祭に寄せて』(Þorsteinn Erlingsson: *Rask—Á hundrað ára afmæli hans 1887*) (Guðmundur Andri Thorsson (útg.). 1992: 683)
- ヒヤウルマル・ヨウンソン『人の死』(Hjálmar Jónsson: *Mannslát*) (Guðmundur Andri Thorsson (útg.). 1992: 48-49), 『アイスランドは1874年に国王をシングヴェトリルに出迎える』(抄) (*Ísland fagnar konungi sínum á Þingvelli 1874*) (ib. 43)
- ヨウハン・シーグルヨウンソン『お眠りなさい、愛しい子』(Jóhann Sigurjónsson: *Sofðu, unga ástin mín*) (Bartoczek/Tran 1991: 118)
- エイナル・ベーネディフツソン『北極光』(Einar Benediktsson: *Norðurljós*) (Guðmundur Andri Thorsson (útg.). 1992: 746-747)
- フルダ『翼をください』(Hulda: *Ljáðu mér vængi*) (Vigdís Finnbogadóttir (valdi). 1989. 81-82), 『だれにもっと美しい祖国があらう』(*Hver á sér fagra föðurland*) (Stevens (ed.). 2004: 164)
- ダーヴィズ・ステーファウンソン『お母さんは眠ろうとしているの』(Davið Stefánsson: *Mamma ætlar að sofna*) (ib. 25)
- トウマス・グヴズムンソン『日本の詩』(Tómas Guðmundsson: *Japanskt ljóð*) (Tómas Guðmundsson: *Ljóð Tómasar Guðmundssonar*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1989: 174-175)

*本研究は科研費(21520425)の援助を受けたものである。

参考文献

- Andersen, Erik (udg.). *Islandske Noveller*. København. Norden. 1945.
- Andrés Kristjánsson et al. (útg.). *Íslenzkir pennar. Sýnisbók íslenskra smásagna á tuttugustu öld*. Reykjavík. Setberg S-F. 1956.
- Andrésson, Kristinn E./Bruno Kress (Hrsg.). *Isländische Erzähler*. Berlin. Aufbau-Verlag. 1963.
- Árni Sigurjónsson/Peter Hallberg (utg.). *Tanken strövar vida. 25 ísländska smásögur*. Reykjavík. Mál og menning i samarbete med Bokklubben Norden. 1990.
- Ásgeir Pétursson/Steingrímur J. Þorsteinsson (eds.). *Seven Icelandic Short Stories*.

- Reykjavík. The Ministry of Education. 1960.
- Bandle, Oskar et al. (eds.). *The Nordic Languages*. HSK 22.1/2. Berlin/New York. de Gruyter. 2002/05.
- Bartoczek, Stanislaw/Anh-Dao Tran. *Icelandic for Beginners*. Reykjavík. Bréfas skólinn. 1991.
- Bartiske, Heinz (übers.). *Moderne Erzähler der Welt: Island*. Tübingen/Basel. Erdmann. 1976.
- Bartiske, Heinz/Ingeborg Drewitz/Sigurður Magnússon (Hrsg.). *Land aus dem Meer. Zur Kultur Islands und der Færöer Inseln*. Tórshavn. Emil Thomsen. 1980.
- Beck, Richard (ed.). *Icelandic Lyrics. Originals and Translations*. Reykjavík. Þórhallur Bjarnarson. 1930.
- Beck, Richard (ed.). *Icelandic Poems and Short Stories*. Princeton. Princeton University Press for the American-Scandinavian Foundation. 1943. (Repr. Freeport, New York. 1968).
- Bergkvist, Sven O./Heimir Pálsson (övers.). *Berättelser från Island*. Stockholm. Rabén & Sjögren. 1976.
- Bien, Horst (Hrsg.). *Nordeuropäische Literaturen*. Leipzig. VEB Bibliographisches Institut. 1980.
- Birr, Ewald (Hrsg.). *Literatur aus Nordeuropa*. Berlin. Willi-Bredel-Bibliothek, Stadt- und Bezirksbibliothek Rostock. Zentralinstitut für Bibliothekswesen. 1990².
- Bjarni M. Gislason. *Islands litteratur efter sagatiden. ca. 1400–1948*. København. Aschehoug Dansk Forlag. 1949.
- Björn Þorsteinsson/Bergsteinn Jónsson. *Íslands saga til okkara daga*. Reykjavík. Sögufélag. 1991.
- Boucher, Alan (tr.). *Short Stories of Today by Twelve Modern Icelandic Authors*. Reykjavík. Iceland Review. 1972.
- Brøndsted, Mogens. (Hrsg.). *Nordische Literaturgeschichte 1, 2*. München. Fink. 1984.
- Dóra Hafsteinsdóttir/Sigríður Harðardóttir (ritstj.). *Íslenska alfræðiorðabókin. I–III*. Reykjavík. Örn og Örlygur. 1990.
- Einar Laxness. *Íslandssaga I–III*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1998² (1995).
- Erlendur Jónsson. *Íslensk bókmenntasaga 1550–1950*. Reykjavík. Bókagerðin Askur. 1977⁵ (1960).
- Eskeland, Ivar (utg.). *Island forteller*. Oslo. Den norske Bokklubben. 1979.
- Firchow, Evelyn Scherabon (ed.). *Icelandic Short Stories*. Boston. Twayne Publishers & The American Scandinavian Foundation. 1974.
- Friese, Wilhelm. *Nordische Literaturen im 20. Jahrhundert*. Stuttgart. Kröner. 1971.

- Glauser, Jürgen (Hrsg.). *Skandinavische Literaturgeschichte*. Stuttgart/Weinar. Metzler. 2006.
- Guðmundur Andri Thorsson (útg.). *Þjóðskáldin. Úrval úr bókmenntum 19. aldar*. Reykjavík. Mál og menning. 1992.
- Guðmundur A. Th. et al. 2006a/b → *Íslensk bókmenntasaga IV/V*.
- Guðmundur Hálfðanarson. *Historical Dictionary of Iceland*. Lanham, Maryland et al. The Scarecrow Press. 2008² (1997).
- Gugenberger, Eva/ Mechthild Blumberg (Hrsg.). *Vielsprachiges Europa*. Frankfurt a. M. et al. Peter Lang. 2003.
- Gunnar Gunnarsson. *Dimmufjöll. Sögusafn*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1976.
- Gunnar Karlsson (tr. Anna Yates). *A Brief History of Iceland*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- Halldór G. et al. 1996 → *Íslensk bókmenntasaga III*.
- Halldór Kiljan Laxness (Ingegerd Nyberg-Fries/Peter Hallberg/Leif Sjöberg (övers.)). *Píplekaren. Noveller*. Stockholm. Rabén & Sjögren/Vi. 1955.
- Halldór Laxness (udg. Chr. Westergård-Nielsen). *Noveller*. København. Steen Hasselbalchs Forlag. 1944.
- Halldór Laxness (übers. von Ernst Harthern). *Die gute Jungfrau und andere Erzählungen*. Hamburg. Rowohlt. 1958.
- Hannes Pétursson/Helgi Sæmundsson. *Íslenskt skáldatal a-1/m-ö*. Reykjavík. Bókaútgáfa Menningarsjóðs og Þjóðvinafélagsins. 1973/76.
- Haugen, Einar. *Die skandinavischen Sprachen*. (übers. von Magnús Pétursson). Hamburg. Buske. 1984.
- Heimir Pálsson. *Straumar og stefnur í íslenskum bókmenntum frá 1550*. Reykjavík. Íðunn. 1978.
- Heimir Pálsson. *Frá lærdómsöld til raunsæis. Íslenskar bókmenntir 1550-1900*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1999.
- Heimir Pálsson. *Sögur, ljóð og líf. Íslenskar bókmenntir á 20. öld*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1999.
- Helga Kress/Idar Stegane (utg.). *Lystreise og andre islandske noveller*. Oslo. Pax Forlag. 1976.
- Helga Kress (ritstj.). *Draumur um veruleika. Íslenskar sögur um og eftir konur*. Reykjavík. Mál og menning. 1977.
- Henriksen, Carol et al. (eds.). *Studies in the Development of Linguistics in Denmark, Finland, Iceland, Norway and Sweden*. Oslo. Novus Forlag. 1996.
- Horton, John J. *Iceland. World Bibliographical Series vol. 37*. Clío Press. Oxford/

- Santa Barbara. 1983.
- Hovdhaugen, Even et al. (eds.). *The History of Linguistics in the Nordic Countries*. Jyväskylä. Societas Scientiarum Fennica. 2000.
- Ingi Bogi Bogason et al. (útg.). *Gegnum ljóðmúrinn. Safn íslenskra ljóða á 20. öld*. Reykjavík. Mál og menning. 1987.
- Íslensk bókmenntasaga I-II. Vésteinn Ólason (ritstj.), III. Halldór Guðmundsson (ritstj.), IV-V. Guðmundur Andri Thorsson (ritstj.). Reykjavík. Mál og menning. 1992-93, 1996-2006.
- Jakobina Johnson (tr.). *Northern Lights. Icelandic Poems*. Reykjavík. Bókaútgáfa Menningarsjóðs. 1959.
- Jóhann Hjálmarsson. *Íslensk nútímaljóðlist*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1971.
- Jóhannes Nordal/Valdimar Kristinsson. *Iceland. The Republic*. Reykjavík. The Central Bank of Iceland. 1996.
- Jón Dan. "The Elfin. A Short Story". (tr. Mekkin S. Perkins). *The American-Scandinavian Review*. Vol. 47. 1959. 67-72.
- Jón R. Hjálmarsson. *History of Iceland. from the Settlement to the Present Day*. Reykjavík. Iceland Review. 1993.
- Kennta, M. E./Gabriele Stauner/Sigurður A. Magnússon. *Svona er Ísland í dag*. 2000. Reykjavík. Háskólaútgáfan.
- Knüppel, Christine (Hrsg.). *Isländische Literatur in deutscher Übersetzung 1860-2000*. Köln. Seltmann & Hein. 2002.
- Kress, Bruno (Hrsg.). *Erkundungen. 27 isländische Erzähler*. Berlin. Verlag Volk und Welt. 1981²(1980).
- Kristinn E. Andrússon. *Íslenskar nútímabókmenntir 1918-1948*. Reykjavík. Mál og menning. 1949.
- Kristinn Kristjánsson. *Íslenskar bókmenntir 1550-1900*. Reykjavík. IÐNÚ. 1996.
- Kristján Eiríksón/Sigurborg Hilmarsdóttir. *Bókastoð. Ágrip af íslenskri bókmenntasögu*. Reykjavík. IÐNÚ. 1999.
- Kristján Karlsson (ritstj.). *Íslenskar smásögur 1847-1974. I-III*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1982-83.
- Lindroth, Hjalmar (utg.). *Från Island. Nutidanoveller i översättning*. Uppsala. Lundequistska Bokhandeln. 1932.
- Lyhne, Otto. (red.). *Lademanns Leksikon. 1-4*. København. Lademann. 2003
- Magnús Pétursson. *Isländisch*. Hamburg. Buske. 1978.
- Mitchell, P. M./Kenneth Ober (eds.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation. Islandica XL*. Ithaca/London. Cornell University Press. 1975.

- Napóleon Bónaparti. Smásögur 1880–1960.* Reykjavík. Mál og menning. 1998⁵.
- Neijmann, Daisy (ed.). *A History of Icelandic Literature.* Lincoln & London. Nebraska University Press/The American-Scandinavian Foundation. 2006.
- Nordstrom, Byron J. (ed.). *Dictionary of Scandinavian History.* Westport, Connecticut/London. Greenwood Press. 1990.
- Ober, Kenneth H. (ed.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation, 1971–1980. Islandica XLVII.* Ithaca/London. Cornell University Press. 1990.
- Paul, Fritz (Hrsg.). *Grundzüge der neueren skandinavischen Literaturen.* Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1982. 343–376.
- Poestion, Joseph Calasanz (Hrsg.). *Isländische Dichter der Neuzeit in Charakteristiken und übersetzten Proben ihrer Dichtung.* München/Leipzig. Georg Müller. 1905² (1897).
- Runnquist, Åke. *Moderna nordiska författare.* Stockholm. Forum. 1966.
- Sigurður Nordal. *Íslensk lestrarbók 1750–1930.* Reykjavík. Bókaútgáfan Þjóðsaga. 1980¹⁰ (1942).
- Silja Aðalsteinsdóttir. *Bók af bók. Bókmenntasaga og sýnisbók frá 1550–1918.* Reykjavík. Mál og menning. 1993.
- Simek, Rudolf/Hermann Pálsson. *Lexikon der altnordischen Literatur.* Stuttgart. Kröner. 2007.
- Stefán Einarsson. *History of Icelandic Prose Writers 1800–1940.* Ithaca, New York. Cornell University Press. 1948.
- Stefán Einarsson. *A History of Icelandic Literature.* Baltimore. The John Hopkins Press/The American-Scandinavian Foundation. 1957.
- Stefán Einarsson. *Íslensk bókmenntasaga 874–1960.* Reykjavík. Snæbjörn Jónsson & Co. H. F. 1961.
- Stevens, Patrick J. (ed.). *Dictionary of Literary Biography: Icelandic Writers, vol. 293.* Farmington Hills MI. Gale. 2004.
- Vésteinn Ó. et al. 1992–93 → *Íslensk bókmenntasaga I/II.*
- Vigdís Finnbogadóttir (valdi). *Íslensk kvæði.* Reykjavík. Mál og menning. 1989.
- Víkingur Kristjánsson/Þorfinnur Skúlason (útg.). *Upplýsingaröldin — Úrval úr bókmenntum 18. aldar.* Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- Westergård-Nielsen, Chr. (red.). *Ny nordisk Novellekunst.* København. C. A. Reitzels Forlag, Alex Sandal. 1942.
- Wolf, Kirsten/Árný Hjaltadóttir (tr.). *Western Icelandic Short Stories.* Winnipeg. University of Manitoba Press. 1992.
- Zimmermann, Lutz (Hrsg.). *Europäische Anthologie: Neue Literatur aus Litauen,*

- Albanien, Island und Finnland*. Berlin. Literarisches Colloquium. 1988.
- Zuck, Virpi (ed.). *Dictionary of Scandinavian Literature*. New York/Westport, Connecticut/London. Greenwood Press. 1990.
- Örn Sigurðsson (ritstj.). *Kortabók Íslands*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- 浅井辰郎/森田貞雄『アイスランド地名小辞典』帝国書院. 1980.
- グウズベルグル・ベルグスソン (菅原邦城 訳)「選ばれた女」谷口 編 (1987:181-195).
- 清水 誠「現代アイスランド文学作品集 (1)-(5)」『ノルデン 28-30, 32-33 号』ノルデン刊行会. 1991:27-65, 1992:21-56, 1993:21-57, 1995:33-49, 1996:17-59.
- 清水 誠「アイスランド語」(石井米雄 編『世界のことば・辞書の辞典 ヨーロッパ編』三省堂. 2008:360-376.
- 清水 誠「アイスランド語研究と辞書編集の歴史」『日本アイスランド学会会報第 28 号』2009:1-34.
- シーグルズル・ノルダル (菅原邦城 訳)『巫女の予言:エッダ詩校訂本』東海大学出版会. 1993.
- スヴァヴァ・ヤコブスドッティル(金子貞雄 訳)「子供のための話」谷口 編(1987:197-207)
- スウェンソン (伊藤 保 訳)『ノンニと氷のお国』エンデルレ書店. 1948.
- スウェンソン (山口四郎 訳)『ノンニの冒険』(世界児童文学全集 23) あかね書房. 1960.
- スノリ・ストゥルルソン (谷口幸男 訳)『ヘイムスクリングラ:北歐王朝史 1, 2』北歐文化通信社. 2008/09.
- ソルザン・美也子『風がよごれていない国 アイスランド』同時代社. 2001.
- 谷口幸男 訳 (小澤俊夫 編)『世界の民話 アイスランド』ぎょうせい. 1985.
- 谷口幸男 編『現代北欧文学 18 人集』新潮社. 1987.
- ハルドール・キリヤン・ラックスネス (山室 静 訳)「原爆基地」(『ノーベル賞文学全集 13 ラックスネス, カミュ, アンドリッチ』) 主婦の友社. 1972:18-122.
- ハルドール・ラックスネス (渡辺洋美 訳)『極北の秘教』工作社. 1975.
- ハルドール・ラックスネス (谷口幸男 訳)「魚釣り行」谷口 編 (1987:209-238).
- H. ラックスネス (山室 静/林 譲二/山口琢磨 訳)『独立の民』大日本雄弁会講談社. 1957.
- 森田貞雄『アイスランド文法』(大学書林) 1981.
- ラックスネス (坂井松太郎 訳)「リーリャ」(『世界文学大系 94 現代小説集』) 筑摩書房. 1969:377-382.
- ヨウン・アウトナソン編 (菅原邦城 訳)『アイスランドの昔話』三弥生書店. 1979.
- ヨーン・スウェンソン (上沢謙二 訳)『ノンニ兄弟の冒険』厚生閣. 1937.
- ヨーン・スウェンソン (山室 静 訳)『ノンニの冒険』(世界名作全集 82) 講談社. 1954.
- 訂正:「北歐アイスランド文学の歴史 (1)——「リームル」からロマン派まで」(北海道大学

文学研究科紀要 128. 2009 年 7 月. pp.139-194)

p.140 上から 7 行目 レイヴル・エイリクソン→レイヴル・エイリフソン

同 上から 17 行目 Íslendingasögur→Íslendinga sögur

p.148 上から 1 行目 フヴィータダール→クヴィータダール

同 下から 3 行目 脚韻 (ríma)→脚韻 (rífm)

p.152 上から 15 行目 1650 年→1540 年

p.153 上から 11 行目 グヴズブランドゥル・ソルラウクソン→グヴズブランドゥ
ル・ソルラウフソン

p.160 下から 8 行目 Landyfírréttur → Landsyfírréttur

p.162 上から 9 行目, p.167 下から 2 行目, p.185 上から 8 行目 ヨウン・ソルラウク
ソン→ヨウン・ソルラウフソン

同 下から 2 行目 ヨウン・エイリクソン→ヨウン・エイリフソン

p.165 下から 6 行目 1854 年→1855 年

p.179 上から 5 行目 『フンディング殺しのヘルギの歌Ⅱ』→『フンディングル殺しの
ヘルギの歌Ⅱ』

p.181 下から 9 行目 Arnarhfell → Arnarfell

p.190 上から 4 行目 Guðmundur Andri Thorsson (útg.). 1992 → Silja Aðalsteins-
dóttir 1993

同 上から 6 行目 ib.→ Guðmundur Andri Thorsson (útg.).